<資　料>

Enrique Semo ; *Historia del Capitalismo en México : los orígenes / 1521-1763*, México : Era, 1973.

メキシコ資本主義史
——その起源，1521-1763年——(Ⅳ)

エンリケ・セーモ　著
原田金一郎監訳
初谷譲次* 訳

第4章　スペイン人社会（構造）

17世紀メキシコは，しだいに移民と混血の植民地へと変貌しつつあった。移民，その子孫および家族は，〔征服後〕1世紀半をへて，ヌエバ・エスパニャ社会の重要な層を形成するにいたった。コルテスは，テノチティトランの陥落時約1,500名の部下を従えていた。W. ボラーの試算によれば，スペイン人，〔他の〕ヨーロッパ人および家族的紐帯をつうじてかれらの家に住むメスティソの人口は，1570年頃で約6万3,000人であった。さらにその数は，1646年には12万5,000人，1742年には56万5,000人，1772年には78万4,000人へと増加した[1]。すなわち200年間（1570—1770年）で<白人>人口は12倍以上となった。またヨーロッパ人，クリオリョ〔アメリカ生まれの白人〕，メスティソ，カスタ〔混血低階層〕などの全人口に占める割合も，1570年で全人口の0.7%，1646年で18%，1742年で27%と上昇した[2]。

しかしスペイン人社会の経済は，<白人>のみで形成されていたわけではな

＊天理大学外国語学部専任講師

1) W. Borah, *New Spain's Century of Depression*, p. 18.

2) 本書第6章表1参照のこと。このベルトラン算出の数字はバークレイ学派算出の数字と異なっているが，この場合全体として支障はない。

い。カスタ，黒人および，共同体から離れた先住民もまたそのなかに統合されていた。スペイン人社会においては，ペニンスラル〔本国生まれのスペイン人〕とその家族のみが，少数の搾取者階層を形成していた。そしてその社会内部で展開する経済関係が，新しい民族（ナシオン）の坩堝となった。

鉱業や牧業のような新しい経済事業の多くは，人口密集地から遠く離れた地域に出現し，大規模な人口移動を引き起こした。たとえば，北部における鉱業中心地では，さまざまな部族の先住民がメスティソや貧しいスペイン人とともに共住していた。

当初からスペイン人の経済事業の成長は，共同体から引き離された先住民労働者集団の成長をその特徴としていた。16世紀後半，とりわけ17世紀において，このような集団は著しく増大した。都市では半就労状態の＜周縁的＞住民層が形成され，そのなかでインディオ，黒人およびメスティソが融合した。1692年のある報告書は，「〔インディオが――著者注〕ムラト，黒人，メスティソあるいは上述した家々の従者のような低俗で責任感に欠ける人々とたえず接触することで，カスティリア語を学び，ラディノ〔スペイン語を話す先住民〕となった…」と述べている[3]。

また一部のスペイン人も早くから貧困層を形成し，他の低所得層と融合した。そして人夫頭や通訳をつとめ，インディオへのアルコール販売，家畜泥棒あるいは密猟などの非合法的な活動に従事した[4]。かれらの多くはインディオの習慣を受け入れ，＜変節スペイン人＞すなわちサラムリョ（zaramullo）と呼ばれていた。

しかしもっと重要な集団は，メスティソ層であり，共同体にも，また行政職につきその特権を享受するスペイン人エリート層にも属していなかった。

スペイン人は，インドにおけるイギリス人同様，土着の社会を搾取するのみならず，植民地期をつうじて本国の社会構造を模倣して新しい社会構造を形成

3) *Boletín del Archivo General de la Nación*, 1938, vol. IX, n. I. p. 12.
4) Eric Wolf, "La formación de la nación: un ensayo de formulación" II, *Ciencias Sociales*, Washington, 1954, n. 21, p. 104.

した。スペイン人の社会は，イベリア本国社会をヌエバ・エスパニャ社会に驚くほど忠実に移植したものである。その軌跡は，少なくない点で本国社会のそれを忠実に反映している。

しかしイベリア社会のあらゆる要素が，植民地の拠点に移植されたわけではない。ここでは新しい環境への適応と選択の過程が進行し，植民地社会の特殊な個性を形成した。しかし，人口の大部分を占める先住民の反乱の危険性，王室の専制支配の遍在，自律的資本主義傾向の脆弱性および教会の活動が，スペイン人社会と本国とのあいだの絆を強化した。最初の100年間，その影響は直接的なものであったが，やがては確立されたヌエバ・エスパニャの経済構造をつうじて作用することになる。しかしその衝撃は，土着社会の搾取にもとづく植民地システムにおいては，より深刻で，多面的かつ持続的であった。スペインで起こる変化，危機，改革運動あるいは反動はすべて，ヌエバ・エスパニャのスペイン人社会に広範かつ直接的に反映され，相似的現象を引き起こした。

コンキスタドル〔征服者〕の文化的背景は経済システムの形成においてきわめて重要な役割を果たし，さらにその繁栄を促す条件にも遭遇した。何よりもまずスペイン人は新しい生産手段と技術を導入した。他の移住植民地の場合と同様に，それらは徐々に土着経済に浸透した。他方で（一定改良された）新しい生産手段と技術はスペイン人社会の経済的基盤となった。またコンキスタドルは，生産手段以外にも，海の向こうで生まれ，その出生地でたえず育まれた価値体系，イデオロギー，社会的政治的および宗教的制度を移植した。

輸入された上部構造は，新しい経済の発展に大きな影響を及ぼした。たとえば，移住者たちの固いカトリックの信仰心なしには，教会の獲得した強大な経済力を説明することはできない。また先住民共同体は，王室の＜東洋的＞側面のおかげで，新しい条件下で生き残ることができた。さらに，もし植民者がイベリアの貴族階級の生活様式の再現を強く願うことがなければ，メキシコ鉱山のばくだいな富が浪費されることはなかったはずである。

16，17世紀のスペインや植民地社会の経済は，その大部分が経済外的目的に従属させられていたため，上部構造の影響もそれだけ大きかった。かれらの活動の多くは，可能な限りの最大利潤の追及という規範ではなく，慣習，道徳，

宗教，さらには法律の課す目的の観点から実現された。それは，いわゆる多極経済であった[5]。市場法則は作用しているが，それでシステム全体の機能を説明することはできない。貴族の称号が資本よりも価値があった。商売のもうけを修道院につぎこめば免罪がえられた。社会的地位は，所有する生産資本よりも財産や虚飾に左右された。公職獲得への投資はオブラへ〔織物工場〕の獲得よりも確実にもうかる商売だった。裕福なメスティソでも，その出自ゆえに，スペイン人の支配階級に加わることができなかった。インディオは，ヨーロッパ風の衣服を身にまとうことも，武器や馬を所有することも，土地の私的な所有者となることも，また多額の負債を負うこともできなかった。

新しい経済の発展は，文化的要素がきわめて重要な役割を果たす社会的諸価値の体系全体と密接に結びついていた。異なる社会経済構成体において出現した上部構造，すなわちスペインの上部構造がメキシコ経済の形成において強力に作用した。

スペイン人社会の経済において，封建的要素は当初から資本主義的傾向を内包しつつ発展するとともに，早期資本主義（capitalismo temprano）は，封建的要素に従属的に統合されて登場した。そして両者は分割しえない単一の構造を形成していた。

封建制は，以下のような特徴をもっている。

1．スペイン人社会における経済生活は，貢納的専制構造の場合とは異なり，土地およびその他の生産手段の私的所有を中心に展開する。その所有は絶対的な性格を有するものではなく，私的（地主）であろうと団体的（教会）であろうと，一連の経済外的で，身分制的な制約を受けていた。

2．このような所有地に住む労働者の多くは自由人ではなく，なんらかの人的隷従関係をつうじて土地の所有者に縛りつけられていた。これら労働者と農業共同体との紐帯は，著しく弱められたか，場合により消滅さえしていた（ペオナへ）。

3．エスタンシア〔牧場〕やアシエンダ〔大農場〕の経済は，ほとんど自然

5) Oskar Lange, *Economía política*, cap. II.

経済的性格を有する。一つまたは二つの生産物をつうじて局地的市場と結合しながら，内部で消費するものは，ほとんどをみずから生産している。このことは他の事業についてもあてはまる。すなわち，鉱山，インヘニオおよびオブラへは，巨大農業所有地の一部を構成し，その内部ですべての投入財を調達した。

4. 単一の国内市場は，潜在的にすら存在せず，互いに独立するきわめて限定的で，静態的な局地的市場が分散的に存在した。

5. ギルド〔同業組合〕制度は，手工業における事業の多様化，資金調達，および技術革新の導入を阻害した。

6. 王室は社会の階層分化*を神聖化し，その徴税監視の目から逃れるあらゆる私的な活動を圧殺し，もっとも利益の多い分野を独占した。主要大地主である教会は，余剰生産物の多くを非経済的な目的に費やした。すなわち社会の支配的な価値が，資本蓄積や生産的事業の発展を抑制していた。

萌芽的・従属的資本主義（capitalismo embrionario y dependiente）は，以下のような特徴をもっている。

1. 大鉱山は，その内部制度および社会的機能から萌芽的資本主義の芽を構成していた。

2. 鉱業中心地およびスペイン人居住都市は，地域間や分野間の社会的分業，ならびに商業資本や高利貸資本の生産部門への浸透を促した。一部のインヘニオやオブラへは，ある種の資本主義的な性格を帯びていた。

3. 封建社会内部に最初の資本を生みだしつつあった本源的蓄積過程は，略奪，高利貸し，独占的買い占め，危機および苛酷な搾取という現象形態のもとで，ヌエバ・エスパニャにその理想的な舞台をみいだした。しかしヌエバ・エスパニャでは本国とは逆の結果を生みだした。したがってこの過程は，むしろ本源的蓄積=喪失（acumulación y desacumulación primitiva）の過程と呼ぶべきである。

---

* 個人は，個人としてではなく，ギルド，コフラディア，共同体，商人ギルドなどをつうじて社会に帰属する。社会は人種を基盤にした身分集団（castas）に分断されている。

4．ヴィラルによれば，「ローマに高利貸しが存在し，ベネチアに商人が存在したことで，古代あるいは中世の<資本主義>について語るのは，言葉の乱用である。かれらはけっして当時の社会的生産を支配してはいなかったからである」[6]。

このことは，ヌエバ・エスパニャについてもまたいえることである。しかしもう一つの要因として，大小の商業の重要性を忘れてはならない。メキシコ市は，（スペイン帝国のもっとも重要な都市セビリアにつぐ）国際的商業の大中心地であった。そこでは商業資金や高利貸資金が豊富に存在し，投機や事業活動が活発に行われていた。支配階級は消費を輸入に依存していたため，必然的に輸出のための商品を生産しなければならなかった。一部の生産物については，大規模な国内市場が存在した。

これらの要素は総体において，そして総体においてのみ，ヌエバ・エスパニャ経済における萌芽的資本主義の傾向を体現していた。しかしそれはきわめて不安定な資本主義にすぎなかった。規模の点においても，16世紀以前のイタリアやドイツの大商業都市とは比較にならなかった。

しかしスペイン人社会の封建的および資本主義的特徴について指摘するだけでは明らかに不十分であり，スペイン人社会の植民地的状況によって両者ともに相当歪められていたことも強調しておかなければならない。植民地においては，資本の本源的蓄積の第1段階である生産者の生産手段からの剝離および貨幣資産の蓄積が実現された。しかし，貨幣資産はヨーロッパにおいてのみ資本に転化した。略奪と不等価交易は，太古の時代より存在したが，貨幣資産が産業資本に転化したのは，16世紀から19世紀にかけてのヨーロッパの一部の地域のみである。ヌエバ・エスパニャは，本源的蓄積のあらゆる悪夢を経験したが，その革命的効果はほとんど享受しなかった。

国際市場向け商品（銀，金，染料，皮革，カカオ，バニラ）を生産する分野をつうじて，ヌエバ・エスパニャ経済のいくつかの部門は自立性を失った。これらの生産物の価格は国際市場における価格変動に左右されていた。そして，

6) Pierre Vilar, *Sur le féodalisme.*

中心部のマニュファクチュア資本が植民地の広範な非資本制部門を支配し，そのためこれらの部門はマニュファクチュア資本の発展動向に依存していた。

マルクスは『資本論』において次のように述べている。「…産業資本の循環は，（貨幣資本としてのそれであろうと商品資本のそれであろうと），非常にさまざまな社会的生産様式――といっても同時に商品生産であるかぎりでのそれ――の商品流通と交錯している。商品が奴隷制にもとづく生産物であろうと，あるいは農民（シナ人，インドのライオット等）の，あるいは共同体（オランダ領東インド）の，あるいは国営生産（ロシア史の古い時代に現れる農奴制にもとづくそれのような）の，あるいは半開の狩猟民族などの生産物であろうと，それらは，産業資本を表す貨幣または商品にたいして商品または貨幣として相対するのであって……その商品が出てくる生産過程の性格はなんでもかまわないのである……だから，産業資本の流通過程を特色づけるものは，諸商品の出生地の多方面的性格であり，世界市場としての市場の存在である」〔『マルクス・エンゲルス全集』24，135ページ〕。

ヌエバ・エスパニャ経済のもっとも活動的な部門である鉱業は，ヨーロッパにおける資本主義の発展を加速した。しかし植民地においては，その封建的＝資本制的植民地構造を強化し，安定させた。

スペインは，他の強国に植民地の＜計り知れない＞財宝に接近する余地を与えないように，植民地の孤立化に断固努めた。スペインは，ばくだいな金や銀を獲得するが，その他の輸出向けの生産活動の発展には関心を示さなかった。鉱業中心地は，ヨーロッパ経済の延長としての＜飛地＞的性格をすぐに示した。ヌエバ・エスパニャの支配階級は，そこで生みだされる経済的余剰によって限りなくぜいたくな生活を送ることができた。しかし経済的余剰は，中心部においてのみ資本に転化した。

王室ならびに帰国を望むスペイン人が，鉱業部門以外で生産されたヌエバ・エスパニャ住民の余剰生産物を利用するためには，それを商品に転化し現金化しなければならなかった。それゆえ流通が，商品生産よりも速く発達した。ヌエバ・エスパニャでは商品生産が制限されていたにもかかわらず，商業が重要

な役割を果たした。一連の輸出できない商品は，ぜひとも国内市場で現金化しなければならなかった。このことは，貨幣資産所有者にきわめて有利に働くとともに，生産者の所得水準を低下させ，自然経済部門と商業部門のあいだの格差を強化した。

封建的植民地的社会のはざまに置かれた，ヌエバ・エスパニャの萌芽的資本主義は，特有の無力さを伴っていた。そして当初から植民地構造に包摂され，急速にその後の国内資本主義の発展にたいする障害に転化した。

I　銀経済の影響

ヌエバ・エスパニャにおける萌芽的資本主義の軌跡は，銀生産のそれにほぼ一致する。萌芽的資本主義は，銀生産の全盛期に繁栄するが，銀生産が衰退期に入ると，各地で自給経済が強化され，生活は土地中心となり，封建的隷従関係が一般化した。16世紀後半鉱業は，直接鉱業に物資を供給したり，あるいは鉱山で働く人々の需要を満たす一連の分野の発生を促した。農業地帯や牧業地帯には，頻繁に行き交う動脈路をつうじて鉱業中心地と密接に結合する衛星経済が出現した。中央部，バヒオ地方および北部のあいだには，相互依存の緊密な網の目がはりめぐらされていた。鉱山区域の物価の上昇や高い有効需要は，商業を活発化した。銀ブームはスペインから新たな移民を引き寄せた。鉱山地帯では共同体から完全に切り離された最初の賃労働者が現れた。

貴金属の鉱脈の探索と開発は，植民地期の当初からスペイン人の主要な活動のひとつであった。しかしテノチティトラン陥落後の20年間，その努力は報われることがなかった。コンキスタドルたちが一獲千金を夢みて無駄な努力に明け暮れた採掘現場で，何千人もの先住民が命を失ったにもかかわらず，銀の生産量はわずかであった。悪名高いヌニョ・デ・グスマンやコロナドによる最初の北部への大遠征も，期待された成果をあげられなかった。その頃までに新たに誕生した商業経済は，先住民共同体が生産することのできない物資の需要によってのみ成長していた[7]。しかしスペイン人の執念は，ついに報われる時が

7)　Chevalier, *op. cit.*, París, 1952, cap. I, inciso IV, de la parte 1ª.

きた。1546年9月8日，ファン・トロサ率いるスペイン人兵士の分遣隊は，以後ラブファの丘（サカテカス州）と呼ばれる鉱脈を発見した。その鉱脈は，一握りの軍隊長やエンコメンデロによる出資を受け，きわめて困難な条件下で開発されたが，すぐに期待どうりの成果が収められた。その後20年間，鉱山の数は急速に増大した。フランシスコ・デ・イバラはさらに北部を探検し，サンマルティン，ソンブレレテ，アビニョ，グァナセビおよびインデで銀鉱脈を発見した。グァナファトの主要な鉱脈は，1548年と1558年に発見された。1547年には，メキシコ市から2,000キロ以上も離れた場所で重要なサンタバルバラ鉱山が発見された。さらによりメキシコ市に近く，1552年パチュカ鉱山やレアルデルモンテ鉱山が発見された。1年後には，フレスニリョ鉱山（サカテカス州）が，またほぼ同時期，サカテカス州ではマサピル鉱山やチャルチウィテス鉱山が，メキシコ州ではテマスカルテペック鉱山が発見された[8]。

鉱山付近にグァナファト，サカテカス（のちにメキシコ第3の都市となる），タスコ，パチュカ，レアルデルモンテ，サンルイスポトシなどの重要な都市が発生し，1570年，ラブファの丘のふもとに位置するサカテカス市には，スペイン人300家族と500人の黒人奴隷が住んでいた。また1620年のある記述によれば，当時サカテカス市には，ヨーロッパ人1,000家族および総計4万人の人口を有していた。そして水銀法を利用する25の精錬所（hacienda de beneficio）および72のインヘニオが存在し，そこで1万頭のラバを使役する2,000人の労働者が毎日働いていた。また商業面では，衣料品店60軒，食料品店140軒，その他数多くの菓子店，パン屋，ロウソク屋などが営業していた[9]。タスコ市では1580年頃スペイン人150名，奴隷650名，先住民2,500名が生活していた[10]，1610年，トラウァリパンには，1,427名の＜白人＞と2,522名の先住民が住んでいた[11]。

8) Othón, *op. cit.*, t. v, p. 39.

9) J. H. Parry, *The Audiencia of New Galicia in the Sixteenth Century. A Study in Spanish Colonial Government*, p. 186.

10) Othón, *op. cit.*, t. v, p. 36.

11) *Ibid.*, p. 37.

北部鉱山の繁栄は，サカテカス市への道の両側に広がる肥沃なバヒオ地方や広大なケレタロの牧草地の占有と経済発展をもたらした。南部の先住民農民を従えた鉱山経営者，伝道師，小農場主（rancheros）は，バヒオ地方やアグアスカリエンテス盆地に侵入し，その地域をサカテカスの穀倉に変えた[12]。すでに1579年，アルカルデ・マヨル（alcalde mayor）のエルナンド・バルガスは，「7レグアの距離があるサンファン〔デルリオ〕からケレタロ市までのあいだ，さらにその先の2つの町へ続く数レグアにおよぶ道路沿いには，10万頭以上の牛，20万頭の羊，1万頭の馬が放牧されている」と報告している[13]。巡察吏パス・デ・バレシリョは，ヌエバ・ガリシアを訪問したのち，1608年「各鉱石精錬所（hacienda de minas）や多くのエスタンシアには，一般のプエブロ以上に多くのインディオがいる」と述べている[14]。

ラブファ鉱山の危険な開発に着手した少数のバスク人たちは，事実上北部のすべての資産を獲得する銀貴族の始祖となった。かれらは数年で広大な農牧業所有地を獲得し，商業事業や鉱業事業に従事するとともに，みずからの資力で発見や征服のための遠征隊に融資した。サンペドロポトシ丘，サンルイスミナス・デ・ポトシの両鉱山の創設者であり，多数の討伐遠征隊の軍隊長でもあるガブリエル・オルティス・デ・フェンマヨルは，1617年に遺言状の手続きを行ったが，その財産目録のなかには以下のものが含まれていた。

> 奴隷，家屋，小屋および菜園その他を備えたサンペドロ丘鉱山，グァダルカサル鉱山，シェラデピノス鉱山および発見者たちと共同所有するベニョンブランコ鉱山，チャルカス鉱山およびマタワラ鉱山，トラスカリリャの炭焼き小屋と鉱石精錬所，アグアデルベナドに水車2機つきの水銀法精錬所，家屋，菜園，小屋その他を備えた灌漑農地および製粉場，王室官吏の邸宅に隣接するサンルイスミナス・デ・ポトシの屋敷，黒人奴隷15名およびインディオ40名，大家畜5,000頭，子牛30頭，雄牛19頭，やぎ500頭，ミ

12) Othón, *op. cit.*, t. IV, p. 143.
13) *Ibid.*, p. 125.
14) Chevalier, *op. cit.*, p. 133.

スキティク盆地に雌羊と雄羊合わせて4,400頭，去勢牛130頭，雄馬と雌馬合わせて260頭，牽引用および乗用ロバ106頭，荷車4台，鋤の刃10，鍬6，サカテカスから12レグアの所にある鉱石精錬用水車を備えた精錬所（アレエンダ），ミスキティクにある家屋，杭，小屋，菜園および囲い場を備えた5か所のエスタンシア，多数の高級家具，衣服，布，食器，銀もしくは金張り銀の飾り物，古鉄5キンタル〔1キンタル＝46kg〕，水銀30キンタル[15]。

鉱業は，製造業に比べ，あまり労働力を必要としなかった。しかし発達した中心部から遠く離れていたこと，また鉱山や精錬所を設立するのにばくだいな初期投資を必要としたことは，重要な市場の形成を促進した。当初は，ほとんどすべてを中心部から輸送しなければならなかった。それゆえ第一段階は，道路を整備し，防衛すること，そして隊商のための宿泊所と補給所を建設することであった。最初の数年間サカテカス市は，もっとも近接し，探検家たちの出撃地でもあったヌエバ・ガリシアの中心部（とくにグァダラハラ）と結びついていた[16]。

しかし道路は急速に延長され，最初は銀をメキシコ市に輸送するために，やがてはミチョアカン，グァナファト，ケレタロの豊かな農牧業地帯と結合するために，新たな道が切り開かれた。整備事業は着々と進められ，1555年頃には，すでに緊急の荷，たとえば水銀を積んだ重い荷車が，首都から27日間でサカテカスへ到着できるように，サカテカス＝メキシコ間の道が整備されていた[17]。

当初，輸送のほとんどはタメメ（tameme，先住民荷役人夫）に依存していた。タメメが完全に姿を消すことはなかったが，徐々にラバ隊を引き連れる人夫や荷馬車あるいは荷車に置き換えられていった。荷馬車の定期便もはじめて組織されたが，その創始者は修道士セバスティアン・デ・アパリシオで

15) Joaquín Meade, "Minero y apaciguador de nómadas", *Historia Mexicana*, México, vol. x, n. 3, pp. 461-469, pp. 468-469.

16) Philip Wayne Powell, *Soldiers, Indians and Silver*, p. 17.

17) *Ibid.*, p. 18.

ある[18]。隊商の補給センターとなる常設の宿泊所や漂泊インディオ（indios nómadas）の攻撃に備える砦が街道沿いに建設された[19]。

このような中継交易の重要性はきわめて大きく，ケレタロ市は交易のために街道寄りに町を移動させたほどである[20]。

大量の銀と食糧不足は，物価の高騰と商業の繁栄をもたらした。このことは，とくにメキシコ市の商人に有利に働いた。しかしまた一方で，先住民やメスティソの行商（＝輸送）人を大量に生みだした。かれらなくしては，孤立した多くの小農場（ranchería）や鉱山区域は存続しえなかったはずである[21]。鉱山地帯の中央部に位置するいくつかの北部都市は，著しく商業的性格を帯びるようになった。1637年，住民わずか800人余のパラル市に37軒もの商店が存在し，さらにその5年後にはその数は47となっていた[22]。このような商店は，いうまでもなく周囲の鉱山やその地域を徘回する多くの山師へ物資を供給していた。

メキシコ市を出発した隊商は，つるはし，ハンマー，銀精錬所の金属部品，精錬所で使用される特別なシャベルや熊手など，鉱業で直接使用するあらゆる道具や資材を輸送した。とくに重要な商品である水銀は，木で補強された容量0.5キンタルの皮袋で輸送された。アマルガム法の採用以後，水銀は鉱業の必需品となっていた。

また鋤の刃，あらゆる種類のナイフや小刀，仕立て用や靴用の針，鉄製の掘棒刃先，大鍬，鉄棒，鉄塊，亜鉛板，手斧や大斧，釘各種，車軸，鉄製車輪，鉤，鎖や金属製の環，鞍やスペイン製の鞭，蹄鉄，馬具，はさみ各種，剣などの建設資材や農業，牧業および運送業のための道具を供給した。

消費財では，スペイン製あるいはテスココ，プエブラ，バリャドリ，トルカ

---

18) Othón, *op. cit.*, t. v, p. 143.

19) Powell, *op. cit.*, p. 23.

20) *Ibid.*, p. 25.

21) Eric Wolf, "La formación de la nación: un ensayo de formulación", *Ciencias Sociales*, Washington, 1954, n. 21, 22, 23, n. 21, p. 106.

22) West, *The Mining...*, *op. cit.*, p. 83.

などのオブラへで製造された毛・綿・絹織物，毛布および衣服が第1位を占め，それに靴，長靴，ぞうり，ベルト，手袋，さまざまな装飾品，石けん，ろうそくなどがつづく。食料では，砂糖，蜂蜜，油，ぶどう酒，酢，オリーブ，シナモン，イチジク，バナナ，米，各種菓子，イワシ，煙草などを供給した[23]。

16世紀後半，鉱山はまるで磁石のように全国各地から品物を吸い寄せた。コリマ，グァダラハラ，ミチョアカン，プエブラおよびメキシコから，多くの人々が銀ブームの分け前に預かろうとサカテカスへと商品を輸送した[24]。たとえば，パラル市には，クリアカン，グァダラハラ，バリャドリのオレンジ，タバスコやソコヌコのカカオ，ワステカ，ハラパ，クェルナバカ，グァダラハラ，クリアカンの砂糖菓子，メスキタル，コリマ，サカトゥラ，メキシコおよびスペインの酒，ケレタロ，テスココ，プエブラ，ユカタン，トルカ，ミステカの毛織物や綿織物，ミチョアカン，ハリスコの青バナナやココナッツが供給されていた[25]。

銀鉱山付近には，補完的事業が登場した。熔剤（magistral）鉱山は，アマルガムに使用する硫酸銅を供給した。さまざまな人々が，小規模な熔剤鉱山を所有し，パティオ（patio）精錬所の経営者に売却した[26]。アマルガム法は，熔剤以外に塩を必要としたので，塩山が急速にうまみのある事業となった。その多くは，メキシコ北部の砂漠地帯やステップ地帯に位置していた。一部の塩山は，鉱業の中心地から数百マイル離れた場所にあり，かなりの距離を輸送しなければならなかった。しかしながら，サカテカス，グァナファト，タスコの主要鉱山は，塩の定期的な供給をつねに確保していた[27]。鉱山は，坑道や精錬所の建設材として，また植民地期初頭はとりわけ燃料用木炭製造のために大量の木材を消費した。鉱山地帯の森林を回復不能なまでに伐採した木炭アシエンダは，鉱業の中心地付近に発生した小集落であった。このような木炭アシエンダ

23) Powell, *op. cit.*, p. 27.
24) West, *op. cit.*, pp. 78-79.
25) *Ibid.*
26) *Ibid.*, p. 35.
27) *Ibid.*, p. 36.

は，森林およびその伐採許可書，炭焼き人とその家族およびインディオ労働者が生活する小農場，そして生産物を輸送するためのラバ用の囲い地により形成されていた[28]。大量の鉛も利用されたが，その多くはスペインから輸入された。またイスミキルパン，スムパン，マピミ鉱山でも鉛を産出した。

鉱山における家畜や畜産物にたいする大きな需要は，牧業の発展を促した。小牧場は鉱山に鉱山経営者のための食肉および鉱石の採出や運搬に用いる大小の袋用の皮を供給した。主食は，トウモロコシと小麦であり，鉱山付近にはそのための農業アシエンダ群が発生した。さらに農業アシエンダは，フリホル豆，カボチャ，トウガラシなどを鉱山に供給した。

大鉱山の内部体制において，ヌエバ・エスパニャ経済のもっとも重要な資本主義的萌芽が生まれた。たしかに鉱脈や鉱山の所有は制限されていた。国王は，地下資源の本来的所有権を保持しており，国王領有地のみならず都市もしくは私人に属する土地において発見された場合でも，すべての鉱山は国王財産とみなされた[29]。しかし土地の場合とは異なり，事実上鉱山採掘権所有者は私的所有とほとんど変わらない権利を享受し，国王は産出高の5分の1，ときには10分の1の徴収や多大の借入や寄進の強要で満足していた[30]。

鉱山の開発は，合資にもとづく共同経営，多くは株式会社をつうじて行われた。サカテカスの銀山は，バスク人の会社によって開発され，ディエゴ・デ・イバラ，クリストバル・デ・オニャテ，バルタサル・テルミノ・デ・バニュエロス，ファン・トロサ，ビセンテ・イ・ファン・サルディバル，およびディエゴ・エルナンデス・プロアノがその共同出資者であった。トラルプハウァの鉱山は，ホセ・デ・ボルダとミゲル・アルダコの会社が所有していた。バレンシアナ鉱山は，アントニオ・オブレゴン・イ・アルコセル(バレンシアナ侯)，ペドロ・ルシアノ・オテロ，およびディエゴ・ルルの結成する会社により開発された。ペニョン・ブランコ鉱山もまた，ガブリエル・オルティス・デ・フエン

28) *Ibid.*, p. 43.
29) Ots Capdequi, *op. cit.*, p. 146.
30) *Ibid.*, p. 147.

マヨルを主要な株主とする会社の所有であった。発見者がかならずしも鉱山の所有者や開発者となるわけではない。かれらは，多くの場合資金不足のため，冒険家ではないが資産家で実力者でもある企業家と手を組むか，あるいは権利を売り渡すことさえ余儀なくされた[31]。

鉱山の労働者は，a）レパルティミエントによる労働者，b）黒人奴隷およびインディオ奴隷，c）比較的自由な賃労働者，の3つの集団に分類することができる。

16，17世紀，タスコ，パチュカ，イスミキルパン，スルテペックのような中央部や南部の鉱山においては，近隣の村から徴発されたエンコミエンダやレパルティミエントのインディオが支配的であった。北部鉱業中心地では，レパルティミエントはあまり実施されていなかった[32]。最初にほぼ自由な賃労働者の集団が登場したのは，まさにこの地域においてであった。サカテカスでは1550年頃すでに賃労働が現れ，16世紀末頃，戦争地帯*にある鉱山では賃労働が支配的であった。ウェストにより作成された北部の鉱山リストは，すべての鉱山においてかなりの数のインディオの自由賃労働者が存在していたことを示している。シンプソンによれば，16世紀末，サカテカスの鉱山所有者は，不足する労働力の確保を競い，たえず賃金を引き上げていた。1591年，鉱山視察官ガスパル・ヌニェス・デ・レオンは，「サカテカスのこれらの鉱山には，レパルティミエントによるインディオはいない」と述べている。また1608年のある文書は，ナワトル語あるいはタラスコ語を話す1,500名のインディオがサカテカスの鉱山で賃労働者として働くために遠方からやってきたと述べている。16世紀末には，賃労働が北部のすべての鉱山の支配的な労働形態であった[33]。この点でメキシコ北部の鉱山は，18世紀末においてもミタが支配的であったペルーの鉱山とは明らかに異なる。レパルティミエントは，他の分野におけるよりも早く鉱山において衰退した。レパルティミエントの輪番制が，インディオの意思

31）Othón, *op. cit.*, t. v, p. 40.

32）West, *op. cit.*, p. 48.

＊勇猛なインディオが多数居住し，副王政府が完全には支配できなかった地域。

33）*Ibid.*

にかかわらず，鉱山に40日以上とどまることを許さなかったために，鉱業が必要とする常雇の専門的な労働者を提供しえなかったからである[34]。そのため中央部でさえレパルティミエントによるインディオの多くは，非熟練労働に従事していた。

奴隷は，大鉱山の多くでは補完的労働力として利用されていた。インディオの多くは漂泊インディオ討伐をつうじて獲得された[35]。黒人は，メキシコ市で購入された[36]。北部における奴隷数は，サカテカスでは労働力の6％，パチュカでは10％とわずかであった[37]。

自由な労働者も数多く存在したが，その多くは人口密集地から土地の剝奪によって強制されるか，あるいは貢納免除や賃金に引き寄せられ，遠方からやってきた者たちである。また多くのメスティソやムラトも賃労働者として働いていた。パラル鉱山では，メキシコ盆地，ミチョアカン，ソノラ，シナロア出身の労働者，すなわちアカヘ族，ヒヒメ族，オパタ族，タラウマラ族，コンチョ族，メシカ族，タラスコ族出身の労働者が働いていた[38]。かれらは，一般に鉱山や精錬所内のもっとも熟練を要する仕事に従事し[39]，その賃金はレパルティミエントのインディオの賃金を上回っていた[40]。

鉱山内部の労働組織は，第1章において指摘したように，単純協業の枠を超えて，高度な分業制の特徴を示していた。管理者側は，厳格な労働規律を課すことに努めた[41]。

鉱山は，ほぼ国際市場向けにのみ生産していた。銀の90％は輸出され，スペイン人社会は，銀でのみ大量の輸入商品を獲得することができた。以上のこと

34) *Ibid.*

35) *Documentos para la historia de México*, México, 1853-1857. 2a. serie III, Relación en favor del Marqués de Gelves, p. 258.

36) West, *op. cit.*, p. 49.

37) *Ibid.*, p. 43-52.

38) *Ibid.*

39) *Ibid.*

40) *Ibid.*

41) *Ibid.*

から，大鉱業中心地の経済は，内的諸相においても萌芽的資本主義の重要な表徴を呈していたという結論に達せざるをえない。

ヌエバ・エスパニャにおいてもっとも重要な鉱山の状況は以上のようなものであり，全体として当時の世界最大の抽出産業を形成していた。しかし鉱山の多くは，アシエンダ内に包摂された小事業であったことを忘れてはならない。アセンダドは，アシエンダ内のさまざまな分野（農業，牧業，鉱業，オブラへ）への資本や労働力の資源配分を決定する総体的収益性の観点にもとづいて鉱山を開発した。一般に採掘および精錬システムは，きわめて原始的で，労働者は農業に従事するペオンまたはレパルティミエントのインディオであった。

Ⅱ　市場の発展

植民地期の最初の2世紀，2つのタイプのスペイン人都市が存在した。ひとつは，人口密集地に出現した都市で，一般に先住民都市の廃墟の上に建設され，少数のスペイン人とメスティソ，および多数の先住民が住んでいた。16世紀後半まで，このような都市は基本的には先住民共同体から物資を調達していた。先住民共同体は，しだいにその重要性を失っていったが，完全に消滅することはなかった。他方，もうひとつのタイプの都市は，まったく新しく建設された都市で，鉱業や牧業の拡大によるか新たな商業路の延長によって出現した。

第1のタイプの都市は，ある意味で従来の貢納的専制構造に統合されており，都市内部の商業部門も限られていた。他方，第2のタイプの都市は，物資調達のためや，鉱業，商業，牧業あるいは製造業の中心としての機能遂行のために必要な，あらゆる種類のスペイン人事業の発生を促した。しかし都市の支配階級は，農村の支配階級と同じく，副王官僚，エンコメンデロ，アセンダドおよび鉱山所有者からなっていた。封建勢力に支配された農村と，商業の中心地であり資本主義の萌芽である都市とのあいだの対立は存在しなかった。強力な商人オリガルキーを有したメキシコ市はむしろ例外である[42]。しかしメキシコ

42)　カビルドの多くがエンコメンデロやアセンダドに支配されていたことは知られている。フレデリック・パイクは最近の論文で，必需品の価格統制などのカビルドの制限

市においても，カビルド〔市参事会〕は，基本的には農業権益層の手に握られていた。しかしながら，都市は小さいが安定した市場を形成していた[43]。1640年，白人人口の約57%は10都市に居住し，1774年には，12都市に白人人口の61%が集中していた[44]。

白人人口という意味では，メキシコ市は特別な地位を占めていた。すなわち1570年にはヌエバ・エスパニャの白人人口の28.5%，1646年には38.4%がメキシコ市に集中していた。17世紀中頃，メキシコ市はアメリカ大陸最大の都市であった[45]。メキシコ市では支配階級のもっとも富裕な層が，とりまきや多数の物乞いとともに生活していた。またメキシコ市は，ペルー，マニラおよび極東

的な経済政策は，これまでいわれてきたように住民一般の基本的な利益にもとづいて決定されていたというよりは，むしろ，農業経営者の利益に奉仕し，ほとんどつねに商人や手工業者の活動を制限する一方で，農場や穀物・牧畜エスタンシアの活動に刺激を与えていた，と説得力をもって指摘している。Frederic Pike, "Aspects of Cabildo Economic Regulations in Spanish America under the Habsburgs", (*Inter-American Economic Affairs*, 1960, n. 3, pp. 67-83).

43) 各都市はひとつの経済的複合体の中心になるとともに，ヌエバ・エスパニャ以外の地域に位置する他の中心地との接点となった。1625—36年にヌエバ・エスパニャに滞在したイギリス人旅行者トマス・ゲージは，「その都市〔ハラパ——著者注〕の富は，増加傾向にあるサトウキビ栽培アシエンダ，およびラバやその他の家畜を飼育し，一部ではコチニールを採集する現地でエスタンシアと呼ばれる土地に代表される」と述べている。またプエブラについて，「都市の郊外には広場の露店に野菜やサラダを供給する農園がある。小麦は豊富にあり，サトウキビ栽培アシエンダがあちこちにある」と述べている。また，オアハカ盆地について，「多数の羊や牛の群れが土地を埋め尽くし，プエブラ・デ・ロスアンヘレスの毛織物製造所に羊毛を，スペイン商人に皮革を，グアハカ市に肉を供給する…なかでも同盆地を有名にしているのはそこで飼育される良質の家畜である…またサトウキビ栽培アシエンダもある。この利点と，豊富で良質の果物がとれる利点を生かして，グアハカ市は全アメリカで最良の果物砂糖漬けや砂糖菓子の製造で名声を博している」と述べている。*Nueva Relación que contiene los viajes de Tomás Gage en la Nueva España*, pp. 33-43, 121-122.

44) Borah, *New Spain...*, *op. cit.*, pp. 12-14-15-16.

45) *Ibid.*

へ再輸出される物資が流出する，スペイン領アメリカ最大の商業中心でもあった[46]。17世紀初頭に結成されたメキシコ市の強力な商人ギルド（consulado）は，セビリアの商人ギルドと肩を並べるほどであった。ベルナルド・デ・バルブエナは，メキシコ市について以下のように記述している。

> 水上に建てられたこの都市には，堅固な通行路がある。しかし，あまりに多くの人のために狭小となっている……銀，金，財宝，食糧を積んだ役畜の列，荷馬車，荷車，大型荷車などが大量に往来している……毎年商品を満載してやってくるスペインの船隊と中国の船隊が，帰りは財宝や銀をたくさん積んで出港する[47]。

スペインの船隊，中国船，北部の銀を積んだ荷車，染料荷車は，すべてメキシコ市を終着地としていた。ベラクルスやアカプルコは，数少ない貿易港として機能しながらも，寒村でしかなかった[48]。メキシコ市は，遠隔地からも物資の供給を受けた。小麦やトウモロコシは，不足する時期には，メキシコ=ワトゥスコ街道を経由して遠方のオアハカからでさえ運ばれた[49]。17世紀のメキシコ市は，年間17万頭の羊，1万2,000頭の牛，3万頭の豚，22万ファネガ〔1 fanega＝55.5 l〕のトウモロコシおよび18万ファネガの小麦粉を消費した[50]。

マニュファクチュアや工業は，メキシコの農業や牧業の生産する多くの原材料を使用した。メキシコ市北部に位置する高原やプエブラ，トラスカラ，トルカ，イストラワカン，ウィチャパン，ケレタロおよびオアハカ近郊を中心とする羊牧業は，都市の手工業やマニュファクチュアと密接に結びついていた[51]。

---

46) Chaunu, *Séville...*, *op. cit.*, t. VIII, pp. 797, 798.

47) Bernardo de Balbuena, *Grandeza mexicana*, p. 12-13 y. 128.

48) Pierre Chaunu, "Veracruz en la segunda mitad del siglo XVI, y primera mitad del XVII", *Historia Mexicana*, México, vol. IX, pp. 521-557, p. 542.

49) *Ibid.*, p. 773.

50) Chester L. Guthrie, "Trade, Industry and Labor in Seventeenth Century Mexico City", *Revista de Historia de América*, México, 1939, n. 7, pp. 103-134, p. 104.

51) Othón, *op. cit.*, t. VI, p. 382.

サンミゲル・エルグランデのような都市の商業は，基本的には羊毛の取り引きで繁栄していた[52]。また繊維産業に刺激され，綿花栽培はトゥスパン，パパロアパン，その他の地方にまで大きく広がった[53]。

〔征服後〕最初の30年間に家畜が驚異的に繁殖し，定住インディオも急速に肉食の習慣を身につけた。16世紀中頃，スペイン人居住地の食肉の価格上昇を抑えるための禁止令がしばしば出されたにもかかわらず，多くの先住民プエブロには屠殺場があった[54]。また白人およびメスティソ住民も大量に肉を消費し，1563年F.モラレスは，国王にたいし，「インディアスの1都市で，スペインの10都市が消費する以上の肉を消費している」と報告している[55]。エスタンシア経営者（estancieros）は，屠殺場と契約し，遠く離れた牧草地から牧群を引き連れ肉を供給した。17世紀初頭，ヌエバ・ガリシアからヌエバ・エスパニャに年間2万頭の牛が供給されていたと推定されている。ある牧業者（ganadero）が牧群の一部を売却したが，その数は6万頭以上にも達した[56]。

都市近郊では，おもに小麦栽培にのみ従事するエスタンシアが発生した。プエブラ＝アトリスコ地域では，16世紀末，数百人のスペイン人が定着し，その所有地で年間550万リットルの小麦を生産していた。その近くのサンパブロ盆地では，スペイン人の60の農地で400万リットルの小麦が生産されていた[57]。さらにメキシコ，バリャドリ，パツクァロ，グァダラハラ諸都市近郊にも，おもに小麦，大麦，燕麦，トウモロコシなどの穀物栽培に従事する重要な農耕エスタンシアが存在した。やがて小麦栽培は，セラヤの平野部，さらにヌエバ・

52) *Ibid.*, t. VI, p. 383.

53) *Ibid.*, pp. 400-401.

54) 副王がヌエバ・エスパニャ政府の後任者に残した通告（1590—1604年）。(Scholes F. V.) *Documentos para la historia de México Colonial*, II, pp. 63-65.

55) Chevalier, *op. cit.*, p. 86

56) *Ibid.*, pp. 87-123.

57) トマス・ゲージは，メキシコ市の穀倉地帯の役割を果たした両盆地の豊かさを称賛している。*Nueva Relación que contiene los viajes de Tomás Gage en la Nueva España*, pp. 119-120.

ガリシアやヌエバ・ビスカヤの地域においてさえも発達した[58]。

また16世紀には太平洋岸に造船所が存在し，分業や商業を発展させた。造船業は，テワンテペック，ワトゥルコ，アカプルコおよびシワタネホにおけるエルナン・コルテスの活動にはじまり，1542年に最盛期を迎える。その後，15年の空白期間をへたのち，1557年，レガスピとウルダネタのフィリピン遠征用の船を建造するため，ラナビダ港で事業が再開された。

1560年，ラナビダ港で500トンと300トンのガレオン船2隻，約60トンの小船2隻の計4隻の船が建造されていた。おそらくこれらはヌエバ・エスパニャの太平洋岸の造船所で建造された最大の船であった。

この事業のために，監督官や計理官の指揮下で，何十人もの大工，船大工，鍛冶職人，樽大工，索具職人，さらには数百人のレパルティミエントのインディオ労働者が働いていた。

帆柱には，テワンテペック産の木が用いられた。同地産の帆柱は，「ドイツ製の帆柱と変わらないほど良いできばえであった」。ロープがニカラグアに至るまでかき集められたが，十分な量を確保できずセビリアから輸入された。帆に用いる布地の多くは，錨同様ベラクルス産のものであった。樽木細工部分〔船腹〕は，ラナビダやアカプルコで製造された。釘の大部分はスペインから輸入された。

大量の鉄と若干の鋼鉄も使用された。また貝類の害から旗艦の胴体部を保護するために鉛の板が使用された。船に装備される大砲は本国から輸入されたが，砲弾や火薬の一部はヌエバ・エスパニャで生産された。

ミチョアカンのアルカルデ・マヨルのアロンソ・デ・マルティネスにたいし，造船所の住民や遠征隊の隊員用の小麦の購入や製粉，およびビスケット，ベーコン，チーズ，バター，その他の食糧の確保が委託された。またかれには，上記物資の輸送を保障するために必要なあらゆる措置を取る権限が与えられた。

軍需物資や大砲をメキシコ市から陸送するには，道路を整備しなければならなかった。メキシコ=アカプルコ街道については，アカプルコ港とロスヨペス

58) Chevalier, *op. cit.*, p. 56.

川を結ぶ道路およびロスヨペス川横断のための特別のはしけの建設が命じられた。またテンタルコ地方から太平洋岸に至る街道の一部が改修され，さらにはベラクルスからの大砲や弾薬の輸送のためにウトラテペケからテワンテペックまでの道路の建設が命じられた[59]。

熱帯作物のなかでもっとも重要なものは，サトウキビであった。需要の増大に応じて，砂糖と砂糖菓子の生産は急速に増大した。動力源としての水流やさまざまな機械的工程を利用する大規模な農工複合施設であるインヘニオ（あるものは8万あるいは10万ペソで売買された）の数が増大した。17世紀初頭，現在のモレロス州に相当する地域に12のインヘニオが存在した。さらにミチョアカンの熱帯地方に12のインヘニオが，またハラパ付近にもほぼ同数のインヘニオが存在した[60]。シュバリエは，当時多数の小圧搾機（さまざまな飲み物や菓子生産に用いる手動圧搾機 trapichillos）を利用し，年産およそ3,000トンから5,000トンの砂糖を生産する50から60の大規模なインヘニオが存在したと推定している[61]。当時とすればかなりの生産量であり，砂糖生産を唯一の重要な産業としていたブラジルの約3分の1を生産していたことになる[62]。砂糖の一部は数年間輸出されたが，まもなく他の植民地との競争により，ヌエバ・エスパニャの生産者は，国内市場に専念せざるをえなくなった。

銀はヌエバ・エスパニャの唯一の輸出品ではなかった。鉱山のない南部では，コチニールと藍という染料が存在した。青紫色を生みだす藍はヨーロッパにおいて需要が大きく，その栽培は，16世紀後半クェルナバカ近くのヤウテペクにおいてはじまり，やがて他の熱帯地方やユカタンへと広がった。1606年，ベラクルスから出航した船隊は，総額54万6,562ペソに相当する約1,600アローバ〔1アローバ＝115.5kg〕の藍を積載していた[63]。

---

59) Luis Muro, "La expedición Legazpi-Urdaneta a las Filipinas. Organización 1557-1564", *Historia y sociedad en el mundo de habla española*, pp. 141-208.

60) *Ibid.*, p. 66.

61) *Ibid.*, p. 67.

62) *Ibid.*

63) *Ibid.*, p. 62.

ミステカ地方は，染料の主要な生産地であり，メキシコ市からおよそ500キロから600キロも離れていながら，コチニールと藍の交易でメキシコ市と結びついてた。ベラクルスから輸出されたコチニールの額は，スペイン領アメリカの輸出する皮革の総額に匹敵した。さらに17世紀中期以降，藍の輸出額はコチニールの輸出額を上回った[64]。

北部は銀だけでなく皮革をつうじても，国際市場と結びついていた。たえず増加傾向にあった皮革の需要は，基本的には多数のスペイン兵士にたいする制服供給者に依存していた。その他の地域も，短期間にせよ国際市場と結びついていた。たとえば，カカオ，砂糖，バニラ，カンペチェ産木材，綿花などの産品やフランネル，粗ラシャ，毛布などの製品でさえ輸出されていた。東西と南北の２つの大きな軸を中心に，ヌエバ・エスパニャとヨーロッパ，アジアおよび南アメリカを結ぶ交易がたえず行われていた。銀の輸出によってのみ対外市場に結びつくヌエバ・エスパニャというイメージは，明らかに誤りである[65]。

Ⅲ　自然経済と局地的市場

自然経済は，共同体内のみならずスペイン人社会内にもまた拡大していた。通常アシエンダは，農地，牧草地，森林および水源を有していた。とりわけ水源の支配が重要であった。土地は，その一部のみが商品生産に利用され，多くは貨幣賃金のかわりに労働者に貸与されていた。残りの土地は，生産物を吸収する市場がないという単純な理由によって放置されていた。市場向けに集約的な耕作が行われる土地は，つねに非常に限られていた。牧業エスタンシア，糖業インヘニオ，鉱業アシエンダおよび農業アシエンダは，必要物資の大部分を内部で生産する傾向にあった。このようにして生産物の一部のみが商品としての性格をえて，市場に到達したのである[66]。

64）Chaunu, *Séville...*, *op. cit.*, pp. 8 y 709.

65）W. Borah, *Early Colonial Trade and Navigation between Mexico and Peru*, pp. 82–83.

66）アシエンダの内部組織については，次文献を参照のこと。Chevalier, *op. cit.*
George Mc. Cutchen, Mc. Bride, *The Land Systems of Mexico*, pp. 25–81.

おもに市場向けに生産する糖業インヘニオは，牽引用家畜のための牧草地，奴隷やインディオ労働者に食肉や羊毛を提供する多数の牛や羊，食糧用のトウモロコシ畑，そしてとりわけ燃料用の森林や製材所を有していた。オブラへは牧業地域に設立されることが多く，その所有者は同時に大量の羊の所有者でもあった[67]。北部鉱山の所有者は，初期から使役用と輸送用の大量のラバ，労働者の食糧用の牛や羊，小麦・トウモロコシおよび野菜の畑を所有する傾向にあった。このような過程を促進した刺激のひとつは，輸送の困難や，インディオによる攻撃や，買い占めにより騰貴した物資の法外な価格である。また大量の木材や木炭を必要としたため，森林を確保し炭焼き場を設置した。またかれらは鉱石精錬所，貯水池，製粉所，およびあらゆる種類の作業所の所有者でもあった。シュバリエが呼ぶところの北部の金持ちは，砂漠や山間部にしばしば位置する鉱山付近に定住することなく，従者とともに河川あるいは肥沃な盆地近くにアシエンダの邸宅を建てた。このように，多くの中小の鉱山は，大部分の物資の調達に関する限り市場に転化することなく，自給自足的大所有地の中心となった。このようなアシエンダは，銀の生産が衰退すると，閉鎖的となり，牧場あるいは農場としての性格を強めた[68]。それはヨーロッパで広くみられた小農民の自然経済というより，農業および家内工業が大規模に相互関連している大単位の自然経済である。

メキシコのアシエンダのもっとも保守的な特徴のひとつは，内部におけるこのような農業と工業の結合である。この結合が，経済のこれら2分野間の分離と，その結果起こる社会的技術的分化を阻害し，生産物の商品化の速度を遅ら

Bohumil Badura, "Biografía de la Hacienda de San Nicolás de Ulapa", *Ibero-americana Pragensia*, Praga, año IV, 1970, pp. 75-111. Ward Barrett, *The Sugar Hacienda of the Marqueses del Valle*, Minneapolis, 1970. Berthe, Jean Pierre, "Xochimancas: Les travaux et les jours dans une hacienda sucriere de Nouvelle Espagne au XVII siècle", *Jahrbuch für Geschichte von Staat Wirtschaft und Geselschaft Lateinamerikas*, Colonia-Viena, vol. III, (1966), pp. 88-117.

67) Chevalier, *op. cit.*, pp. 68-69 y 228.

68) *Ibid.*, pp. 229.

せた。

主要な鉱業中心地においてのみ，商品生産，および農業と鉱業間の分業が確立した。多くの場合，鉱山の開発は散発的であり，収益が低下したり，資金が枯渇すると鉱山労働者は農業にもどった。

アセンダド，鉱山所有者および商人は，それぞれの分野での活動を拡大するのではなく，ひとつの経済単位における多分野の支配をめざし，自己の支配下にある地域において競争相手が関心を示す可能性のあるすべての活動を独占する傾向にあった。このことは，当時の一般的な市場条件下では，市場と結びつくことで余剰生産物を商品に転化しえた，2，3の生産物以外はすべて自給自足するような経済複合体を形成する傾向を必然的に強めた。

生産物の多くは，大規模な市場をもたなかった。ヌエバ・エスパニャ経済は，ひとつの国内市場ではなく，相互関連に欠ける一連の局地的および地域的経済により形成されていた。必需品に関しても，不足や高騰，あるいは飢餓にさえ苦しむ地域がある一方，そこから遠くない地域が生産過剰に陥っていることもあった。1580年，トラルマナルコでのトウモロコシの価格は，1ファネガ8レアルであったが，そこから少し離れたタクバヤ盆地では12レアルであった。また盆地外からメキシコ市にもちこまれたトウモロコシは，生産地価格の2倍であった。

生産はきわめて限られた需要に対応しており，予期せぬ異変は地域バランスをつねに大きく崩した。うちつづく豊作は，突然の凶作同様に小農場主（ranchero）を確実に破産させた。

地域市場が狭小であったため，アシエンダでさえ既存の資源を十分活用せず，増産にたいする刺激に欠けていた。

一般に大アシエンダが成立した地域においては，とくに穀物を生産するアシエンダの場合，市場の制約のため生産単位としてのその正常な発展が抑制された。16世紀末のプエブラ地方の小麦やトウモロコシのアシエンダ，17世紀中頃鉱山に食糧を供給した小農場やアシエンダ，あるいは17世紀末のメキシコ盆地のアシエンダなど，すべて比較的短期間に大アシエン

ダが地域の需要を満たすことができた。しかしいったんその目標が達成されると，地域市場の構造，遠距離，劣悪な道路事情，高い輸送費およびスペイン王室の商業政策により，その余剰生産物は地域の枠を超えることができず，その生産能力が最大限に発揮されることはなかった，とフロレスカノは指摘している[69]。

一部の熱帯地方は，トウモロコシを大量に生産していた。しかし市場不足により，利用されなかった。そのためこのような肥沃な土地の農民は，あるインフォーマントが伝えるように，しばしばコサマロアパンの農民と同じ行動をとらざるをえなかった。すなわち，「〔コサマロアパン地方では〕，収穫はきわめて多いが，〔農民は〕みずから消費するトウモロコシを収納したのち，収穫の多くを買手がないため焼却し，捨てている」[70]。

生産の後進性と供給が困難なために，価格は地域により大きく変動した。輸送の困難性，アルカバラ〔売上げ税〕および漂泊インディオの攻撃は，地域間交易を大きく阻害し，生産物を高騰させ損失を増大させた。

貿易品のもっとも重要な流通幹線路であるメキシコ=ベラクルス間においては，不定期的な商船隊の到着は，しばしば完全失業状態にある輸送人夫たちを多忙へと追いやった。物価や商品の状態もそのことを反映していた。すなわち商品の乱暴な扱いにたいする苦情が増え，輸送費が急激に変動した。1653年，ぶどう酒1樽の価格は，セビリアからメキシコまで輸送されると1,000％上昇し，ベラクルスから首都まで輸送されると，さらに70％ほど上昇した。1612年11月，ベラクルスからメキシコ市までのぶどう酒1樽の輸送費は13ペソであったが，これはセビリアにおけるぶどう酒の価格を相当上回っていた[71]。

1575年以降，ヌエバ・エスパニャにおいてもアルカバラの課税がはじまった。当初は，交換または売却されたすべての商品に2％の税が課されたが，18世紀

69) Enrique Florescano, *Estructuras y problemas agrarios de México, 1500-1821*, p. 129.

70) *Ibid.*, p. 131.

71) Chaunu, *Séville...*, *op. cit.*, p. 716.

になると6％，1770年には8％にまで上昇した。ヌエバ・エスパニャは，80の＜アルカバラ徴税区＞に区分され，各区ごとに最初の売却に新たに課税された。そのために局地的市場の枠を超える商品にはより大きな負担となった。アルカバラは副王財政の主要な財源となるとともに，国内市場の発展を抑える最大の障害となった。

小規模な局地的市場の本質的特性は，原始的な生産方法，および商業資本と高利貸資本の支配である。村あるいは町が僻地にあればあるほど，その地域の商人の力は強大となり，生産者を縛りつける隷属形態もより露骨なものとなる。自然経済が支配的であるために，農村においては貨幣が不足し，資本の大きさをはるかに超える権力をその所有者に与えることになった。もっとも原始的な生産形態と隷属を打破しつつ，これらの小市場を統合させ，ひとつの国内市場に統合しうるような資本主義がメキシコに出現するのは，19世紀末のことである。

資本主義的企業は，小規模な局地的市場を基礎に発展することはできない。資本主義の法則は，生産方法の恒常的な変革と生産規模の拡大である。ヌエバ・エスパニャにおける一般的な条件下で，生産単位の多くは，重要な技術上の変化を知らず，狭小な地域市場の枠を超えることなく，数世紀のあいだ機能しつづけた。逆に，資本主義的企業が存在しうるためには，地域市場，さらには国内市場の枠組をも急速に乗り超える必要があった。16世紀から18世紀にかけて，まさに国内市場の制約によって，広大な国際市場を確保することなしには，いかなる分野においても資本主義的発展を開始することはできなかった。ヌエバ・エスパニャでこの要件を満たした分野は，唯一貴金属鉱業のみであった。

Ⅳ　手　工　業

手工業は厳しく規制されていた。すでに1542年，絹織物職人ギルド（gremio）に関する命令（ordenanza）が公布されている。1548年には，鞍や馬具を作る鞍職人と馬具職人に関する命令，1549年には，紐職人に関する命令，1550年に

は鍍金職人および塗装職人に関する命令がそれぞれ公布されている[72]。これらの命令につづいて，創意性，手工業企業の分化過程および資本蓄積を窒息させる封建的拘束衣の典型となる多くの命令が公布された。

17世紀初期に結成された針職人のギルドがその例である。メキシコ市には3名の親方しかいなかったにもかかわらず，法規は15節から構成されていた。同法規は親方の1人が審査官および調査官となることを定めていた。なんぴとも審査を受けずには職人になれず，またメキシコ市外からきた職人が開業する場合には同市のカビルドの許可を必要とした。インディオ，メスティソおよびムラトは，審査を受けることも，針の商いに従事することもできなかった。それぞれの親方は1店舗の権利しかもたず，カスティリアから針を輸入することも禁じられていた。価格は，1レアルあたり縫い針8本，裁縫職人用針6本，手術用針4本，ろう職人用針4本，そしてラバ追い用針4本と厳しく定められていた[73]。

小手工業者は，その独占的地位を維持することが自己の利益となることを理解し，ギルドとともに競争の排除に努めた。可能な限り他者を自己の領土から排除し，小領主としての，すなわち小範囲だが固定した顧客をもつ絶対的主人としての自己の地位の強化に努めた。工房では，習慣化，細分化および偏狭が支配的であった。

多くの命令は，企業の成長とその分化を阻止するためにそれぞれの工房で働ける徒弟および職人の数を制限した[74]。1年から3年奉公してはじめて，職人は親方になることができた。そのためには奉公していた親方同伴で審査官のもとに出頭しなければならなかった。審査に合格すること以外にも，スペイン人の血統であること，そして一定額の開店資金を必要とした。ときにはそのような要件を何年も満たすことができず，高齢になってようやく審査を受ける者も

72) Manuel Carrera Stampa, *Los gremios mexicanos.*（詳細な年代記的リスト参照のこと）。

73) Cuthrie, *Trade...op. cit.*, p. 125.

74) Carrera Stampa, *op. cit.*, p. 31.

あった。またひとつの企業でさまざまな技術や職を身につけること，職人が複数の職種の親方になること，あるいは複数のギルドに属することが禁じられた[75]。

すべての製品は，ギルドの検印を必要とした。検印は毎年審査官に届け出され，品質や大きさなどの保証となった[76]。審査官は，違反者を裁判にかけることができた。ギルドに関する命令の違反者は，罰金，製品および仕事道具の破壊や没収などの処罰，あるいは投獄，追放，体罰，手・足の切断，そして場合によっては死刑さえ含む権利の喪失からなる処罰により厳しく罰せられた[77]。

Ⅴ　国内商業とオブラへ

国内商業もまた厳しく規制されていた。製品は，価格および品質について検閲を受けた。価格は，各都市のカビルドの任命する審査官および参事が決定した。メキシコ市の場合，新鮮な果物については毎日，オリーブ，乾燥果物，魚，ベーコン，チーズおよび砂糖その他類似の食糧は毎月，そしてパンについては3か月ごとに価格が定められた[78]。

店舗数は制限され，17世紀のメキシコ市においては，肉屋5軒とパン屋34軒のみが認可されていた。各肉屋にたいして商品とその販売を監視する2名の調査官が任命されていた[79]。

各店で販売できる品物は指定されていた。1619年，酒屋業者（taberneros）が商売の範囲を広げようとした。当時かれらは，木材，木炭，ろうそくなどは販売できたが，野菜や果物を売ることは禁止されていた。かれらは，その種の食糧は市場では午前10時から11時のあいだに売り切れ，その時刻にお金をもたない多くの貧しい人々は，食糧をえることができないと申し立てた。繰り返し陳情したのち，午前中に食糧を購入しないこと，そして午後1時前に販売しな

75) *Ibid.*, p. 57.
76) *Ibid.*, p. 137.
77) *Ibid.*, pp. 130, 135.
78) Guthrie, *op. cit.*, pp. 122–123.
79) *Ibid.*, p. 115.

いことを条件に販売が許可された[80]。メキシコ市の商人ギルドは，商業のもっとも重要な分野を支配し，ごく少数のアセンダドや商人グループの利益のために独占を維持した。一般に厳格な規制は大アセンダドに有利に作用する傾向にあり，工業や商業の発展を抑制した。

このような状況下においては，より進取的な中小の商人は，非合法的または半合法的に活動せざるをえなかった。植民地主義勢力と封建的勢力の権益は密接に結びついたので，中流階級の大半は法律の周縁で生計をたてていた。酒類を無許可で生産する者，トランプを非合法で売る者，輸入品や地方の商品あるいは金・銀の密売人などが横行していた。このような社会層の重要性はしだいに高まり，植民地期の最後の50年になると，封建的規制によって抑圧されているブルジョワジーの萌芽となり，かれらのなかから多くの優れた戦士が誕生した。

メキシコ市の豚肉販売業者は，官吏が価格を統制する市場への商品持ち込みを避け，需要と供給が決定する価格により，自宅で販売した[81]。果物や野菜を同様にして売る小商人もいたが，1619年，メスティソ，黒人およびムラトがこのような商売を理由に逮捕された場合，200回の鞭打ちおよび2年間の漕手刑を宣告するよう命令が下された。警吏が同様の罪を犯した場合，免職および40ペソの罰金刑が課された[82]。

オブラへは禁止されはしなかったが，国家の保護を享受することはけっしてなかった。この国家の保護なしには，イギリスやオランダなどの国でさえ，工業の勝利はありえなかったであろう。マニュファクチュアの数は制限され，その建設は一部の都市のみで許可された。製品とその価格は，手工業製品ほどではないにしろ相当厳しい規制を受け，1592年以降はとくにその傾向が強められた。また，輸入品から現地生産を保護したり，外国市場の獲得を促進するための措置は取られなかった。植民地権力はつねに，セビリアの商人がもたらす商品を優先した。オブラへに重くのしかかる労働規制は，労働者の苛酷な搾取を

80) *Ibid.*, p. 121.
81) *Ibid.*, p. 118.
82) *Ibid.*, p. 106.

阻止できなかったが，事業の拡大と成長を確実に阻害した。副王は，マニュファクチュアと職人ギルド間の紛争においては，ほとんどつねに後者を支持した。

オブラへの職人の工房にたいするおもな優位性は分業にあった。オブラへでは水力や若干の機械が利用されていたとはいえ，一般には手作業が支配的であった。そのため大オブラへが小オブラへを消滅させたり，職人の工房を駆逐することはできなかった。マニュファクチュアは，都市手工業や農村家内工業によって形成される構造に包摂されていた。マニュファクチュアの製品は，部分的には後者の部門で作られることが多かった。オブラへは手工業と機械制工業との中間に位置する鎖を構成するが，機械制大工業到来の前兆をなすような，国際市場向けに生産し，何百，何千という賃労働者の働く大工場からはほど遠かった。

マニュファクチュアは，16，17世紀のヌエバ・エスパニャにおいて支配的な工業形態となりえず，自らの枠組とは異なる枠組のなかで，特権的地位を享受するギルド制手工業と併存していた。オブラへとは，地域的孤立やギルド手工業および家内制手工業への従属により，先資本制的性格を有するマニュファクチュアのことである。

Ⅵ 貨　幣

商品経済の拡大は，貨幣の導入を必要とした。植民地期初頭，貨幣が非常に不足し，コンキスタドルは鋳貨されていない金や銀をとくに利用した。金は砂金あるいは小片の形で，銀は板状あるいは棒状の形態で使用された。貨幣の秤量単位は最も一般的なスペイン通貨の重さ（peso）にもとづいて設定された。もっとも一般的なペソという名称はこのことに由来する。最高単位は，金ペソ（peso de oro），または金カステリャノ（castellano de oro），鉱山金ペソ（peso de oro de minas），検査済み金ペソ（peso de oro ensayado），あるいは高品位鉱山金ペソ（peso de oro de minas de ley perfecta）などと呼ばれ，約450マラベディ（スペインの通貨単位）の重さに等しかった。最小単位の金は，普通金ペソ（peso de oro común），流通ペソ（peso de lo que

corre）あるいはテプスケ・ペソ（Tepuzque，約290から320 マラベディ）と呼ばれていた。1テプスケ・ペソは市場においては銀8レアルと交換された[83]。このような金単位は，それに等しい銀単位とともにほぼ植民地期をつうじて使用された。国王は，鋳貨の不足により経済活動に支障をきたしていた植民者たちの度重なる要請に答えて，1535年金貨，銀貨および銅貨の鋳造権を持つ造幣所（la Casa de la Moneda）の設立を命じた[84]。

さまざまな計算によれば，採掘された貴金属の約90%がヌエバ・エスパニャで鋳造されていた。1537年から1731年にかけて，金貨および銀貨で7億6,060万ペソというばくだいな額が鋳造された[85]。しかしわれわれはこの数字から，ヌエバ・エスパニャ経済の貨幣化の度合いを過大評価してはならない。貨幣の鋳造は，実際には鉱山や染料と同じく輸出産業であった。ヌエバ・エスパニャにおいては取り引きの10%のみが公用貨幣で行われた。取り引きの大部分は，現地貨幣または物々交換をつうじて行われた。賃金の多くは，カカオ豆で支払われていた。またすべてこうしたことには，トラコあるいはクラコ，すなわち木，銅あるいは石けんで作られた現地の代用貨幣が広く利用されていた。商人やアセンダドはこのような貨幣を流通過程に専横的に導入し，小売商人や消費者に押しつけていた。このような貨幣は，いつでも商品や公式貨幣に交換する意思が発行者にある限りにおいて価値を有し，発行地以外ではその価値を大幅に下げた[86]。自然経済の広範さと市場の制約のために，このような貨幣は公用金貨や銀貨よりも広く普及していた。

Ⅵ　資　　本

資本を「消費から控除され生産に投下される財貨の総体」あるいは「利潤をえるために利用されるすべての貨幣」と定義するならば，インディオ共同体に

83) Wilbur T. Meek, *The Exchange Media of Colonial Mexico*, Nueva York, 1948, p. 52.

84) *Recopilación de las Leyes de Indias*, ley 1, tit. 1, libro IX, fol. 130.

85) Meek, *op. cit.*, p. 51.

86) *Ibid.*

おいてさえ，容易に資本を発見することができよう[87]。しかし家畜，道具あるいは貨幣が，生産や流通に投入され利潤をもたらすためには，また，市場における生産物の実現過程や蓄積が可能であるためには，一連の社会的前提条件の存在が必要である。

マルクスによれば，「資本は，物ではなく，一定の，社会的な，一定の歴史的な社会構成体に属する生産関係であって，この生産関係がある物であらわされてこの物に一つの独自な社会的性格を与えるのである」[88]。

また他の箇所では，「黒人は黒人である。一定の諸関係のもとで，はじめて彼は奴隷となる。紡績機械は紡績のための機械である。一定の諸関係のもとでのみ，それは資本となる。これら諸関係から離されたら，それは資本ではない。そのことは，金がそれ自体としては貨幣ではなく，また砂糖が砂糖価格ではないのと同じである」[89]。

本来の意味での資本であるためには，2つの条件が必要である。

- 労働力の商品への転化，市場における労働力購入の可能性，および賃労働の一般化。
- 生産的企業が局地的市場の枠を超え，生産規模の持続的拡大と生産技術や方法の改良過程にすすむに必要なレベルに至るまでの市場の発達。

しかし，資本制的生産から派生する蓄積に先行して，先資本制社会内部において資本が発生しなければならない。この過程をマルクスは資本の本源的蓄積と呼んだ。これは本質的には，多くの民衆から土地，生活手段および労働用具を奪うことであり，かつ資本家の手にそれを集中させることである。そのメカニズムは多様で，国ごとに異なる。したがって，その形態と過程そのものを混

87) Salisbury, *From Stone to Steel*, および Max Weber, *The Theory of Social and Economic Organization*, ただし，Maurice Godelier, *Rationalité e irrationalité en Économie*, pp. 262-263. より引用。

88) C. Marx, *El Capital*, Ed. Cartago, t. III, p. 691. 〔『マルクス＝エンゲルス全集』25 b, 1044 ページ。〕

89) C. Marx, *Trabajo asalariado y capital*, p. 39. 〔『マルクス＝エンゲルス全集』6，403ページ。〕

同してはならない。

本源的蓄積は2局面に分けることができる。

商業資本および高利貸資本は，ヨーロッパ社会のみならず多くの先資本制社会においてかなりの発展水準にまで到達していた。東洋の一部の先資本制社会では，おそらくそれ以上の水準に到達していた。しかしマンデルが指摘するように，それは「経済生活の周縁部，すなわち生産や，この生産に関連する流通の枠外において発達する過程である。もしこの種の活動の結果として大きな資本が実際に蓄積されたとしても，封建的要素がいまだ支配的であるような社会条件下では，資本はけっして経済の主人とはなりえない」[90]。

商業資本は，市場向けに生産していない人々または社会集団間の仲介者としての機能を，独立した形態において果たすことができる。このように交換は生産過程外から導入され，生産過程への交換の影響は，これらの社会の構造に完全に左右される。この本源的蓄積の第1局面における商業資本は，当該の人々の生産構造を変化させることなく，それはそのまま完全に存在し，成長しつづけることができる[91]。

資本が支配的な地位を獲得するのは，われわれが産業的本源的蓄積と呼ぶ，本源的蓄積の第2局面においてである。その違いは，とりわけその過程の規模にある（ホブズボーム流にいえば，資本主義は，すでに一定の資本主義が存在する場所においてのみ勝利する）。16世紀から18世紀にかけては，小生産者からの収奪とそのプロレタリア化，植民地世界からの略奪，かつてない規模の商業資本と高利貸資本の出現（株式会社，証券取引所，銀行など），ブルジョワジーの政治的勝利，農民戦争など一連の現象が交錯した。そしてその結果は質的なものである。すなわち，資本が生産に浸透し，つぎつぎと経済諸分野を支配していった。経済は，仲介者的な商業資本の活動の結果としてではなく，しだいに勢力を拡大するマニュファクチュア中心の登場により商品化される。

---

90) Ernest Mandel, *op. cit.*, p. 156.

91) Karl Marx, *Gründrisse der Kritik der Politischen Ölkonomie* (*Rohentrourf*), pp. 742-43; 420-21.

すでに商業資本は，たんなる仲介者としてではなく，国内産業の推進者として成長する。

16，17世紀のヌエバ・エスパニャにおいては，本源的蓄積がとりわけ商業資本および高利貸資本の形成に至ったという意味で，第1局面の特徴が支配的であった。この種の資本は，わずかに生産に関与するのみで，異種混交する生産構造の隙間を埋めていた。産業的本源的蓄積の芽が力強く姿を現すのは，社会的，地域的分業が進行し，鉱業，牧羊業，マニュファクチュアおよび輸出農業が複合して頂点に達する18世紀の後半である。

このように，16，17世紀のヌエバ・エスパニャにおいては，商業資本や高利貸資本の発展，あるいは生産者の加速度的収奪にもかかわらず，産業資本の本源的蓄積の十全な過程は存在しなかった。

ヌエバ・エスパニャにおける資本のもっとも一般的な形態は，商業資本である。その独立した発展は，マルクスが指摘するように，資本制的生産の発展につねに反比例している。

商業資本は，ときには先住民共同体とスペイン人都市間のような，発展段階の非常に異なる生産領域間の仲介者の役割を果たした。たとえば，メキシコ市において〔先住民共同体からの〕馬の飼料用のまぐさの仕入れを担当していた官吏（alguacil）の場合がそれである。副王は，まぐさ不足のために取り引きを担当する官吏を任命した。この官吏は，まぐさ3カルガにつき銀1レアルを受け取った。かれは海岸部において150粒あたり1レアルという安いカカオを購入し，まぐさ1カルガにつき25粒，すなわち3カルガで75粒を先住民に支払った。このように，官吏は支出した0.5レアルにつき，まぐさの購入者から1レアルを受け取り，100％の利潤を獲得した。かれは，毎日約200レアルのまぐさを売却し，100レアルの利潤を獲得した。さらに先住民に無償で64レアルから80レアル相当のまぐさを提供させ，一部の住人から高額の賄賂を受け取りつつ，それらを売却した[92]。官吏はその商売により造幣所長官の給料約6,000ペソを

92) González Gómez de Cervantes, *La vida económica y social de Nueva España al finalizar el siglo XVI*, pp. 110-112.

上回る年間約6,500ペソを稼いだ[93]。この官吏は，カカオを生産しながらも中央部の市場と直接パイプをもたない共同体の孤立状況，生産の後進性によるメキシコ市のまぐさ不足，そして職務上の権限を利用した。かれの儲けの源は，国内市場の拡大，生産の増大と正常化，および経済活動の政治支配からの解放によって必然的に閉ざされることになった。

商業資本が，未発達の共同体間の生産物交換のためのたんなる橋渡しであるかぎり，商業利潤は窃盗あるいは詐欺として現れる。17世紀の初め，メキシコの住人は必需品の不足をしばしば嘆いている。かれらによれば，品物不足はとりわけ，インディオが町で直接商品を売るのを＜悪徳商人（regatones)＞が妨害しているためであった。インディオが，果物や野菜をもって市場に近づくと，小売り商人たち（雇われてあるいは自営で活動する多くは黒人またはムラト）がかれらの前に立ちはだかり，品物を取り上げ，さらにそれを売ることで100％の利潤をあげていた[94]。

商業資本は，多くの地域でエンコメンデロや役人の活動と密接に結びついていた。ある実力者を中心にその地域の商業活動のすべてを独占する取り巻き集団が形成された。かれらはきわめて厳重な独占をつうじて，わずか数年で巨額の富を築いた。シュバリエによれば，1602年，住民数わずか160名のグァダラハラにおいて，サンティアゴ・ベラ博士がそのような役割を果たしていた。かれの家には大きな貯蔵庫があり，そこで穀物やバターをはじめ，チャパラ湖付近で作られたオレンジ水，農産物など，さまざまな商品を購入することができた。かれは37名の親戚郎党にかこまれ，その多くは同じ屋敷内で暮らしていた。かれの一族はその地域の唯一の商業的富である家畜を独占し，その交易で数年間に30万ペソの財産を蓄積した。娘婿の一人は，エスタンシアに1万頭の雌牛を所有し，自らも出資社員であるグァダラハラの屠殺場に牛を供給していた。またメキシコ市から取り寄せた商品をグァダラハラの商人に15％の利子で信用売りし，さらには北部の鉱山でラバを売り，鉱山経営者には高利で融資していた。こうしてかれの利益は年間10万ペソを越えていた。博士の代父である

93) Meek, *op. cit.*, p. 48.

94) González Gómez de Cervantes, *op. cit.*, p. 100.

ピネドは，子ラバや，トウモロコシの苗を買い占めた。その他に息子や親戚の18名が近隣のアルカルデやコレヒドルの役職につき同様の活動に従事していた[95]。

もうひとつの例は，オアハカのアルカルデ・マヨルであり，2万5,000人のインディオのエンコミエンダの所有者であるファン・ペラエス・デ・ベリオである。兄弟のファン・デルガディリョ，サポテカ地方のアルカルデであり軍隊長でもあった従兄弟のルイス・デ・ベリオ，その他親戚や同郷人とともに，エルナン・コルテスの集団を凌ぐ勢いの官僚＝商人からなる強力な集団を形成した。1529年3月24日付けで，ファン・ペラエス・デ・ベリオはスペインに以下のような手紙を送っている。

> 私は，この地のもっとも利益が多く主要な事業のひとつは商売だと思う。なぜなら，それが真の富源であるのに，人はそれを信用しかねて手を染めようとしないからだ。利益は確実でしかも多いので，つねに品物を取りそろえている店舗があれば，これほどもうかるものはなく，まるで錬金術である。さらに私は，オアハカ地方の軍隊長であり，アルカルデ・マヨルでもある……かの地では運びこんだもののほとんどは消費されるだろう。私がいれば，すべて残さず代金は回収されるだろう。かの地では，衣服をもつ人は優遇され，すべてうまく運ぶだろう。それゆえ，そちらで話したことを実行するように貴殿に送金することに決めた。およそ1,000ドゥカド相当の衣類を当地に運びこみ，この地の状況，すなわち，カスティリアの衣服への需要があるということなので，4,000あるいは5,000ドゥカド以上の返金ができ，神もお喜びになることだろう。

アルカルデであるかれは，同じ手紙のなかで送金を1,700ペソと790ペソに分けて送るよう伝えているが，両方とも商品の購入あるいは商人への負債の支払いにあてられたものである[96]。

95) Chevalier, *op. cit.*, pp. 127-128.

96) Enrique Otte, "La Nueva España en 1529", *Historia y sociedad en el mundo de habla española*, pp. 103-106.

これらは特殊なケースではない。エンコメンデロ，アセンダドあるいは役人が富源の主になれない地域では，その地域の独占者が商人となることが多い。商業資本は土地の封建的所有やスペイン王室の官職と結びついて現れる。商業資本はまさに市場の狭小性ゆえに肥大する。地方生産者の局地的制約性，資金不足，あるいは孤立性に起因するたび重なる局地的な過剰生産や不足のために，必要な手段を有する商人は法外な利益を手にすることができた。

メキシコ市において，国際交易と結びついた明瞭なオリガルキーが出現した。その経済的・政治的組織は商人ギルドである。ピエール・ショーニュによれば，「大商業は，メキシコの社会的ヒエラルキーの頂点に位置し，インディアスの他のいかなる地域よりも重要な役割を果たしていたようである。その地位は，大西洋岸のヨーロッパ大都市において大商業が占めていた地位にのみ比較しうる」[97]。

当時の大商業資本は，市場のもつあらゆる欠陥や生産の後進性を利用し，かつ，それらを固定することに努め，あらゆる形態で厳重な独占を実行した。こうして大商人たちは，ヌエバ・エスパニャにおける生産の発展を制約するような多くの措置を支持した。かれらは，独占を維持するために誕生まもない絹織物産業の壊滅につとめ，輸入と競合するオブラへの発展を制約する命令を支持するとともに，他の産業にたいしても容赦なく攻撃した。また，都市による農村の搾取や，職人および小生産者の剰余生産物の吸収を強化する，さまざまな価格統制や独占を促進した。

大商業を支配したのは，互いに競合する独立した商人でも，イギリスのような株式会社でもなかった。スペインの貿易商人は，職人ギルド同様きわめて厳格で，典型的に封建的な団体に組織されていた。

商人ギルドは，カタルニアの＜コンソラ・デ・マル (Consolat de Mar)＞に由来するスペインの古い団体である。コンソラ・デ・マル自体もその起源は，ピサやジェノバの＜コンソラト・デル・マレ (Consolato del Mare)＞にあった。商人ギルドは，各商人の活動を規制する商業裁判所の機能，および社会を分割する他の団体にたいして商人全体を代表する協同団体としての機能を

97) Chaunu, *Séville...*, *op. cit.*, t. 8, p. 734.

兼ね備えていた。

商人がギルドに加盟するためには，年齢，資本，活動など一連の要件を満たさなければならなかった。組合員は，年次総会で1名の会長と2名の理事からなる役員を選出した。かれらは現役の商人であり，また組織の権力を握る30名の評議会（Junta de Gobierno）の構成員でもあった。これらの役員と並んで，かれらの活動を補佐する5名の<代議員（diputado）>団がいた。重要な決定は，理論的には総会で行わなければならなかったが，総会は開かれないことが多かった。

スペインにおいては1283年，バレンシアにおいて最初の商人ギルドが設立された。以後，マヨルカ（1343年），バルセロナ（1347年），ペルピグナン（1388年），ブルゴス（1494年），ビルバオ（1511年），セビリア（1543年），サンセバスティアン（1682年）においてつぎつぎと商人ギルドが設立された。

海外との交易が盛んに行われた最初の70年間，メキシコの商人は個々に活動していた。しかし1592年，ある商人グループの要請で商人ギルドが設立された。この組織は，けっして商社的な性格をもたず，商人ギルド自身が輸入や輸出あるいは購入や販売などの業務に一度も携わることはなかった。要するに，国家に支援された専門職組織であり，その機能は厳密に組合的性格を有していた。

商人ギルドは大商人の資金力を統合し，かれらの利益の代弁者あるいは擁護者として，植民地時代のもっとも有力な団体のひとつとなった。たえず資金を必要としていたスペイン国王は，借財あるいは<寄進>をしばしば商人ギルドに要請した。同様に副王もまた周知の公共事業への融資を商人ギルドに要請した。いうまでもなく，このような献金は，きわめて大きな特権や特典と引き換えに行われた[98]。

---

98) Smith, Robert Sidney, "The Institution of the Consulado in New Spain", *Hispanic American Historical Review*, v. XXIV, Durgham, 1944. および Cuice, Norman Clarence, *The Consulado of New Spain 1544-1795*, University of California, Berkeley, 1952. Ph. Tesis. を参照のこと。

小商業もまた重要な位置を占めていた。インディオやメスティソの行商人は各地を渡り歩き，定住先住民の消費するトウモロコシ，フリホル豆，トウガラシ，綿花，カボチャ，マゲイ製品の地域間交易の仲介者としての役割を果たしつつ，かろうじて生活を維持していた[99]。都市の中小の商人は，かれらより裕福であった。1686年，メキシコ市の大広場には323店舗（当時はカホンと呼ばれていた）が存在していた。その数があまりに多く，広場での荷車の通行を妨げたため，1660年，市議会は店舗の整列を命じなければならなかった[100]。さらに，自己の生産物を直接販売する小生産者も多数存在した。メキシコ市では，鴨を捕える多くのインディオ，テスココ湖で製塩するインディオ，さらには小鳥の餌として，ハエ，ミミズ，昆虫を金持ちに売るインディオがいた[101]。このような小生産者の多数の存在は，分散，孤立，技術的後進性の明白な現れである。

植民地の最も重要な債権者は教会である。教会は，征服後数十年で利潤，慈善事業，あるいは寄進による資金を＜利子付資本貸付＞（抵当貸付）へ投下することができる財政政策を確立していた。

当初，初歩的な方法が用いられた。すなわち教会に属する個人あるいは団体にたいし寄進または地代を提供しようとする者で，必要な金額をもたない者は，当該の聖職者あるいは団体が実際には請求できないがその名義となる所有地にたいし，5％の利子を支払った。

所有地に課せられたこの負担は，センソ（censo）と呼ばれた。資金が増大するにつれ教会は，適当な保障を提供しうる者から要請があった場合いつでも，資金の融資を行いはじめた。多くは不動産を担保としたが，例外的に保証人だけで融資する場合もあった。所有地の管理権はこの契約にもとづいて債権者に移転し，債権者の承認なしには，いかなる変更も許されなかった。債務の期限は5年から9年で，そのあいだ5％の利子を支払わねばならなかった。理

99) *Ibid.*, pp. 716-718.
100) Guthrie, *op. cit.*, p. 107.
101) Gibson, *op. cit.*, pp. 347-351.

論的には，期限が切れれば債務は返済されなければならなかったが，実際にはほぼつねに限りなく延長され，所有地は永久に担保状態にあり，債務は所有地とともに相続された。

教会の財政活動は，遺言書・カペリャニア・慈善事業評議会が中心となって担当した。評議会は，18世紀になると何百万ペソという資本を操作する重要な貸付機関となり，専門の職員を雇い，詳細な会計業務を行っていた。

教会の貸付活動は，農村部および都市部の所有地の大半が教会によって管理されるまでに発展した。ほとんどすべての貸付資本はかれらの手にあった。シュバリエによれば，「多数のセンソやカペリャニアが，農村部の所有地に重い負担としてのしかかり，表面的には広大なアシエンダの所有者のように見えても，現実には収入の三分の一あるいは四分の一しか享受できない者が多かった」[102]。

トラスカラの154のアシエンダやランチョに課せられたセンソは，農村部の所有地にたいする負担がどれほど重いものかを示している。

次表に示されるように，所有地の65％以上が抵当に入り，センソや債務の総額は，全体の資産価値総額の42％以上にも達した。

教会の手中にある貸付資本は，資本制的生産の発展を大きく抑制し，また当時の大浪費家であるアセンダドや不動産所有者に全面的に奉仕していた。すなわち，教会の貸付資金の多くは，生産にではなく過度の消費に向けられた。教会の＜高利貸的精神＞のために，センソや抵当貸付の資金は豊富にあったが，生産活動向けの投資資金は不足していた。一般に抵当貸付の利子が5％であるのにたいし，生産活動の場合，20％以下で資金を獲得するのは不可能であった。鉱山，オブラへあるいは商業において蓄積された貨幣＝資本の多くは，寄進，遺贈，慈善事業などをつうじて＜センソ＞へと転化した。教会の資本は，資本主義の発展が必要とする機能とはまったく逆の機能を果たした。すなわち高利貸資本を生産資本に転化させることなく，鉱山資本，農業資本およびマニュファクチュア資本が＜センソ＞に転化する上で決定的な要因となったのであ

102) Chevalier, *op. cit.*, p. 218.

トラスカラのアシエンダ・ランチョの負債（1712年）

地　　区	農場数（アシエンダ・ランチョ*）	センソ（抵当）の対象になっている農場数	センソ（抵当）の対象になっていない農場数	データのない農場数	農場の価格総額（ペソ）	抵当総額***（ペソ）
アピサコ	13	8	2	3	124,050	59,770
ワマントラ	38	29	2	7	515,222	214,690
ウエヨトリパ	12	3	—	9	149,100	13,700
ナティビタス	33	27	1	5	411,965	225,700
サンフェリペ・イスタクイストラ	23	10	—	13	171,900	32,800
サンタアナ・チアウテンパン	20	11	5	4	140,075	74,170
トラスコ	16	14	2	—	257,325	127,905**
合　　計	155	102	12	41	1,769,637	748,735

*　アシエンダ領域外に位置し独立した所有地をなすランチョのみ含めた。

**　負債額が判読できないセンソがひとつある。

***　すべてのセンソが教会に由来するのではなく，わずかながら民間のものもある[103]。

出所：Isabel González Sánchez, *Haciendas y Ranchos de Tlaxcala en 1712*, Instituto Nacional de Antropología e Historia, México, 1969.

る。

しかし教会のみが資金を貸付けていたわけではない。メキシコ市の大商人あるいは地方の小商人でさえもコチニール，藍，バニラ，などの生産に<融資>したり，農民の収穫物や鉱山経営者の既存の投資を担保に貸付けていた。フロレスカノによれば，「たとえば，プエブラの商人はベラクルスの海岸部の綿栽培農民に，北部の商人はブドウ，トウモロコシを栽培する農民や牧業者に，グァダラハラの商人はその地方の農民に融資していた。商人は，とりわけ地方において多くの農民にたいする融資銀行に似た機能を果たしていた」[104]。高利は貨幣資本の形成を加速化したが，多くの場合，生産形態を本質的に変化させるのではなく，価格の高騰まねき，生産形態の発展を阻害した。社会的剰余生産

103)　Isabel Gonzáles Sánchez, *Haciendas y Ranchos de Tlaxcala en 1712.*

104)　Florescano, *op. cit.*, p. 165.

物の多くは，非生産部門の手に集中した。

資本の一部は，生産に投下された。鉱業への投資については，本書の第2巻においてくわしく触れることにする。商人は手工業者に融資し，その製品を購入した。かれらは労働者を一定の分業下で，自宅で生産させる＜分散的マニュファクチュア＞を生みだした。大規模なオブラへも存在したが，局地的市場を超えるオブラへはほとんどなかった。17世紀になると，メキシコ盆地の49のオブラへの平均労働者数は，45名であった。小規模なオブラへで30名，大規模なオブラへになると120名もの労働者が働いていた。[105] いうまでもなく，ひとつの作業場で何千人という労働者を働かせていた同世紀のフランスやオランダの巨大マニュファクチュアとは比較にならない。

オブラへのあるものは，大きな石造りの建物のなかにあり，かなり高価な設備を備えていた。フェルナンド・コルテスの財産目録（1549年）のなかに，織物オブラへに属する設備として以下のようなものが記載されている。

> 縮絨機〔おもに水力によって軸を中心に回転する大きな木のつちからなる機械で，生地をたたき，脂気を抜き，縮絨するために用いられる――著者注〕，縮絨機用の水車と小川，粗ラシャの織り機2台と生地，紡錘および鉄製ハンドルを備えた糸撚り機21台，撚り糸の玉13アロバ，完成品および未完成品の生地多数[106]。

また16世紀末のオリサバの製糖工場の財産目録には，鉄製道具，釜，銅製品，機械の部品作製用のかまどおよび大工道具一式，製粉所，さまざまな家屋（圧搾所，煮沸所，2つの精糖所），数10頭の牛やラバ，多数の奴隷（16世紀末，1人あたり約400ペソの価値）が記載されている[107]。

しかしこのような生産手段は，初期的な資本制的生産関係に照応する限りにおいて資本とみなすことができる。アシエンダの局地的需要を満たす小さなオブラへで用いられる縮絨機は，国内のある地域の必要性を満たす大規模なマニ

105） *Ibid.*, p. 243.

106） Othón, *op. cit.*, 6, p. 380.

107） Chevalier, *op. cit.*, pp. 63-64.

ュファクチュアで用いられるまったく同型の他の縮絨機とは完全に異なる社会経済的意味をもっている。

最初の投資家は，国王の官吏たちであった。副王，聴訴官，市参事会の構成員などのみが，投資に必要な資金を所有していた。高級官吏は，その職務を終えて本国へ帰還する際にその財産を売却し，下級官吏は自分の生活を都市の生活に近づけようとするか，多くは有力なアセンダドとなった。鉱山経営者，商人あるいは教会が農業への投資を開始するのは，1580年以降である[108]。

16世紀以降，アセンダドによる投資は，ほんのわずかである。アセンダドの多くは，教会あるいは民間の利子資本あるいは高利貸資本に頼らざるをえなかった。このような状況について，プエブラの司教フランシスコ・ファビアン・イ・フエロは，以下のように述べている。

> 農場所有者である農民自身が，この嘆かわしい〔農業の〕衰退に大きく関与していることは見過せない。ある者はほとんど土地の耕作を放棄し，かれらにふさわしい質素な生活に満足することなく，余計な支出，賭博あるいはその種のことに浪費することで……没落し……所有者と呼ばれる者の多くが，売買契約書あるいは競売書に書かれた権利しか〔実際はもっていない〕。これらの証書を注意深くみれば，このような真実を納得できるだろう……なんらかの現金を支出してアシエンダが購入されることはまれで，多くは，文書や競売の費用を払い，その抵当元金〔アシエンダにかけられた抵当〕を〔購入者〕が認めることで，所有することができる。そして数年間〔抵当を償還しないか，あるいは利子を〕支払わないまま手放し，債権者を愚弄することになる。つまり，現実にはその購入は無意味なものとなる。このようにしてすべての遅滞から被害を被るのはセンソの所有者である……このような詐欺行為は昨今〔1767年〕，頻繁に行われている。緊急に資金を必要としている農民が契約するのであれば，債務はより回収可能である。なぜなら農民は，〔資金なしには〕かれら自身そして家

108) Florescano, *op. cit.*, p. 162.

族を養えないことを知悉しており，資金があれば家を建て，アシエンダを経営し，農地を耕作し，作物を収穫し，資金なしでは必然的に陥ったであろう困窮から抜け出すからである……

（このようにして，司教は結論づける）……アシエンダ所有者の多くは，必要に迫られてであれ，浪費のためであれ，センソの負担を負うので，その全生産物の額さえ支払うべき利子の額にはおよばない[109]。

農業に投下された利子資本は，資本主義的発展を促進するのではなく，既存の半封建的体制を発展，維持する役割を果たした。この問題についての詳細な研究はないが，そのような貸付資金の多くは，さらにランチョやアシエンダを購入することにより既存の所有地を拡大するため，または農業の変動要因による不均衡（価格低下による損害，不作，破産あるいは管理人による横領，新しい作物の失敗）を修復するため，あるいは生産外の目的に投下されたと考えられる。耕作技術の改良，あるいはアシエンダの生産性向上のために基本的に利用されたことを示す証拠はない。

生産性や収益を上昇させること，あるいは技術革新をつうじて生産費を減少させることに興味を示さなかったのは，国内市場が形成されていなかったことや，局地的市場が狭小であったためである。農業経営者にとっての問題は生産を拡大することではなく，目前の市場を支配することにあった。それゆえかれらは，技術革新にではなく，土地を独占し，安価な労働力を獲得し，そして局地的市場を支配するために多額の投資を行う必要があった[110]。

アセンダドが，資本主義的企業の所有者ではなく，まさに何千ヘクタールという土地と何百人という人々の上に君臨する地代生活者となるために発見者や植民者として力を注いだのは，＜スペインの遺産＞でも＜クリオリョの怠慢＞でもなく，まさに上述した状況に原因があった。

ヌエバ・エスパニャの体制は，生産に投下される資本に拘束衣を着せていたようなものである。市場は，あるいは正確には諸市場は，企業が安定的に成長

109) *Ibid.*, pp. 172-173.〔角カッコ内の注は著者によるもの〕
110) *Ibid.*, pp. 174-175.

するためにはあまりに小さすぎた。王室，教会およびギルドが課す協同組合的制約，非独占的生産者に不利な価格制度や諸規約，高価な輸入品を好む消費傾向，インディオによる＜ヨーロッパ的＞製品消費の法的制約，銀形態での剰余搾取，あるいは資本の輸出などは，16，17世紀のヌエバ・エスパニャに存在したものよりも活動的な萌芽的資本にとってでさえ，克服しがたい障害であっただろう。

資本の軌跡を観察すれば，それは蓄積と持続的成長の過程ではなく，資本が領主的資産に変化する過程であることがわかる。利潤の多くは，奢侈品，豪華な建物，貴族の称号，修道院に入る女子のための持参金，教会への寄進，祭礼および賭博などに消費された。

ヌエバ・エスパニャの支配階級は，あふれんばかりの贅沢な暮らしをしていた。

> コンキスタドルたちは，定住して以降すべてにおいて本国に似た世界を創り上げようとしていた……戦いの日々は終わり，黄金の川がたえず流れ，偉業の思い出のみが残った。巨額の富のおかげで，早くからルネサンスの華――プラテレスク様式，衣服，宝石，絵画，宮廷生活――が新世界に伝えられた。西洋の芸術は，ときには融合しつつもアメリカの芸術を圧倒した。スペインの宮廷をみたことも，先住民の王たちの壮麗さに驚嘆したこともないエストレマドゥラ出身の第二世代のスペイン人たちもまた，領主としての新たな身分にふさわしい華麗できらびやかな世界を実現した[111]。

セルバンテス・デ・サラサルによれば，16世紀の後半，タクバ通りの家々は例外なく豪華で，「高貴で裕福な住人にふさわしい大金をかけて建てられていた」[112]。メキシコの金持ちの財産目録には，高価な宝石，衣服，家具が数多く

111) José Durand, "El lujo indiano", *Historia Mexicana*, México, 1956, vol. VI, n. I, pp. 59–74; p. 62.

112) *Ibid.*, p. 64.

みられたが，その大半は外国製品である。

スマラガ司教はカルロス5世宛の手紙のなかで，次のように述べている。

> このバビロニアのような大都市は，衣服や住居の装飾において無秩序や無駄が目立ちます。母君の宮廷においてさえ，あれほどの壁かけや絹の枕を私は拝見したことがありません。当地で今年開かれた2組の結婚式では，それぞれ，3,000ペソから4,000ペソもする装身具を40名から50名の下女が運んでいたと聞いております。

資本が消滅する過程は，17，18世紀のヨーロッパの少なからぬ訪問者の興味を引き，当時の流行言葉がその状況について次のように語っている。

> 父親が商人
> 子供は貴族で
> 孫，乞食

蓄積された資本の多くは，広大な不毛地の購入に費やされた。サバラが指摘するように，大土地所有は，持続的なものではなかったし，また国王や副王のメルセーに直接由来するものでもなかった。その起源は，植民地の高級官僚層の職に由来する特権の非合法的利用，そしてまた土地購入あるいは所有権の合法化のための豊富な資金の所有にあった[113]。

Ⅷ　大農地所有の起源

巨大所有地（latifundio）は，通常その起源において豊富な資金に由来している。そのイダルゴ的精神のために豊富な資金と地位を利用して土地を購入しなかったコンキスタドルの子息は没落し，かれらに代わって，金持ち商人，鉱

113）たとえば，“Cartas del licenciado Jerónimo de Valderrama y otros documentos sobre su visita al gobierno de Nueva España 1563-1565”, *Documentos para la historia del México colonial*, t. VII, pp. 225-227. を参照のこと。

山所有者，あるいは企業活動と多額の財産を相続したクリオリョ娘を獲得することを結びつけた，新参の企業家的移住者が登場する。

大農地所有は，封建的特権と資本が結合して生まれた典型的な例である。征服された土地の所有権は，原則的にはカスティリア王家に帰属した。その特権は，土地の所有を国王の恩恵によるものとすることで，事実上あらゆる土地所有形態を制限し，さらに国庫が必要とするたびに多額の臨時徴税を行うのに役立った。遅かれ早かれ所有者は，所有する土地にたいして王室に多額の金を支払った。

原則的には，国王のグラシアあるいはメルセー〔恩貸〕が，土地の私的所有権の付与を意味した。しかし現実には，所有権はカビルドをはじめさまざまな行政当局に付与された。初期の法令は，付与される土地の大きさを厳しく制限した。当初数年間，当局は，そのような譲渡の制限に努めた。土地は，出自，職業，経済水準の異なる多数の人々に譲渡された。しかし全般的経済状況は，中小の私有地の出現を促す状況にはなかった。

エンコメンデロ官僚や商人からなるオリガルキーは，土地の所有権を集中させるために，非合法的占拠や証書の購入などによって法体系の隙間やあいまいさを利用した。法令は，土地の所有権の移転を一定期間禁じていたが，その売却や譲渡そのものは禁じていなかった。十分な資金をもたない土地受益者は土地を耕作できず，なんらかの事業の資金をえるために早急に土地を売却したり，あるいは持参金とするか，有力者の恩恵に報いるために譲渡した。そのためグラシアあるいはメルセーの証書の投機が急速に増大した[114]。16世紀，すでにメキシコでは，かなり活発な土地売買の市場が存在した。有力者の従者や下僕にたいしてもメルセーの付与が頻繁に行われ[115]，一部の有力者は所有地を拡大するためにかれらを仲介役として計画的に名義貸しを利用した。

---

114)　Ots Capdequi, *op. cit.*, p. 155.

115)　巡察官ヘロニモ・デ・バルデラマは，1551年から1563年にかけて不当に土地の譲渡を受けている副王ドン・ファン・デ・ベラスコ，その家族，知人の従者に関する報告書を作成した。

アンドレス・デ・ビリェガス（従者，毒見役），小家畜用エスタンシア3，1カバ

16世紀末には，多くの土地が証書なしに占拠されていた。合法的に付与された土地の周囲には広大な面積の国王領有地が広がっており，大土地所有者が非合法的に私有地として利用していた。証書なしに占拠されていたそのような無法地（demasías）が，ほとんどすべての大所有地の重要な部分を構成して

リェリアの土地。

アントニオ・オルティス・デ・マティエソ（カスティリアから赴任以来の副王の従者），大家畜用のエスタンシア２。

ヘロニモ・ソサ（執事），大小家畜用エスタンシア９，６カバリェリアの土地，１製粉用地。

アロソン・サン・ビセンテ（従者，馬丁），小家畜用エスタンシア２，１カバリェリアの土地。

ファン・デ・クエバス（副王の寝室侍女の息女と結婚したプエブラ市の書記），小家畜用エスタンシア３，１カバリェリア半の土地。

ガルシア・デ・エスカランテ（副王の従者），小家畜用エスタンシア１。

ファン・カベサス（副王の従者），小家畜用のエスタンシア１。

ファン・デ・ビリェリアス（副王の従者），小家畜用エスタンシア２。

ペトロ・バラカルド（副王の司厨員），小家畜用エスタンシア１。

ルイス・デ・モンソン（副王の赴任間もない従者），小家畜用エスタンシア２，１カバリェリアの土地。

ガスパル・デ・アルマサン（副王の従者），小家畜用エスタンシア１。

クリストバル・デ・マタ（副王の従者），小家畜用エスタンシア１。

ファン・デ・マランサ（副王の従者），小家畜用エスタンシア２，３カバリェリア半の土地。

ペドロ・ロメロ（従者），小家畜用エスタンシア２，１カバリェリア半の土地。

アントニオ・デルガディリョ（副王の従者），小家畜用エスタンシア１，３カバリェリアの土地。

ファン・カルロス・デ・ボニリャ（従者），小家畜用エスタンシア１，半カバリェリアの土地。

フランシスコ・デ・ナバ（副王の故狩人），大小家畜用エスタンシア２，２カバリェリアの土地。

ディエゴ・バスケス・デ・セゴビア（副王およびその家の理髪師），小家畜用エスタンシア２。

ディエゴ・アリアス・デ・ソテロ（給仕），大小家畜用エスタンシア２。

フェリペ・アレリャノ（従者），小家畜用エスタンシア２，３カバリェリアの土地。

フアン・デ・ビリャゴメス（従者），小家畜用エスタンシア１，１カバリェリアの

いた。17世紀初頭，巨大所有地を調査するためミチョアカンに派遣された役人は，「1枚の証書で6枚分の土地を所有している」[116]と報告している。さらにその証書も不正規なものが多く，民間人や共同体から詐欺的あるいは非合法的に購入したものであった。

このように多くのアセンダドは，法の枠外にいた。そのためアセンダドと共同体とのあいだに長い裁判が起こり，地方役人の権力と腐敗を助長することになった。大土地所有は17世紀前半に合法化された。合法化は，国家と金持ちや権力者間の売買契約に似た形態で行われたが，土地の大部分はすでにかれらの所有下にあった。その過程は，多くの共同体にとっては土地略奪の合法化を意味した。

上述した過程は，次のようにして生じた。1591年，国王は2つの勅令でコンポシシオンの原則を確立した。危機的状況にある国庫を救うため，すべての土地所有者はその所有を認定する証書を提示しなければならなかった。もし正当な証書であれば，所有が認められ，そうでなければ土地の価格に応じた一定の支払いを強制されるか，王室財産への返還が要求された。また勅令によれば，「国王および国王を代表する副王または総督が適当と認めれば，そのような土地またはエスタンシアの所有者に証書あるいはメルセー書を提示するよう求め

土地。

マルティン・デ・サリナス（副王の兄弟の従者），大家畜用エスタンシア4，3カバリェリアの土地，店舗用地2。

ファン・デ・サンティリャナ（副王の前述の兄弟の従者），1カバリェリアの土地。

ガスパル・ボニファス（副王の息女ドニャ・アナ・デ・カスティリアの従者），小家畜用エスタンシア2。

ロドリゴ・バスケス（副王の兄弟の従者），1カバリェリアの土地。

このあと，一覧表はさらに副王遠縁の者，知人の従者とつづく。多くの場合受益者が独身であるという点でその権利の非合法性が強調される（既婚者のみがメルセーを付与される権利がある）。

"Cartas del Licenciado Jerónimo de Valderrama..." en *Documentos para la Historia Colonial*, *op. cit.*, t. VII, pp. 225-227.

116) Chevalier, *op. cit.*, p. 210.

ることができる……また合法的に所有および占有しているすべての土地を認めるが，そのかわり略奪した土地は取り上げ，すべてを国庫に返還させる……」[117]としている。

土地所有者は，このような高くつくにちがいない土地の合法化に断固反対したため，その措置は徐々にしか適用されなかった。勅令が公布されて25年後，実施されたコンポシシオンはわずかであった。しかし国王はその措置に固執し，1631年，決定的な命令を下した。それは，土地を横領しているスペイン人は，その土地を保持したい場合，適切な額を支払えばよいというものだった[118]。この要件を満たさない土地は，公開競売にかけられた。同時に，国王はかなりの面積の土地を売却した。これにより一部の富裕な商人は，広大な所有地を獲得した。

このように非合法的土地占拠は合法的権利を獲得し，巨大所有地は確固とした土地所有体制の一部を構成することになった。さらにアセンダドと教会は，金を支払うことによって，土地以外にも水利権，所有地内の森林や牧草地を自由に利用する権利，所有地囲い込みの特権などの決定的権利を獲得した。

それゆえ，メキシコの巨大所有地は，副王官吏職につくか，その官吏との関係を悪用すること，または，多額の貨幣資産の所有という二重の起源を有している。国王への奉仕による直接的で階層序列的な土地付与を起源とする大土地所有は，北部を除いてはまれであった。

---

117) Ots Capdequi..., *op. cit.*, p. 157.

118) コンポシシオンについては，次の文献を参照のこと。José María Ots Capdequi, *El régimen de la tierra en la América Española durante el período colonial.*